西元善郎（竹の台）

（INDEX）

分っているようで分らないこと？	（2019.2）
時代逆行の背景分っているようで分らないこと（2）	（2019.3）
何故、戦争はなくならない？①分っているようで分らないこと（3）	（2019.5）
何故、戦争はなくならない？②分っているようで分らないこと（4）	（2019.6）
何故、戦争はなくならない？③分っているようで分らないこと（5）	（2019.7）
何故、戦争はなくならない？④分っているようで分らないこと（6）	（2019.8）
庶民の心に響く言葉を探し求めて（1）	（2019.12）
庶民の心に響く言葉を探し求めて（2）	（2020.1）
庶民の心に響く言葉を探し求めて（3）	（2020.3）
新型コロナ禍に見る不安の心理	（2020.4）
新型コロナ禍に見る不安の心理（2）	（2020.5）
新型コロナ禍に見る不安の心理（3）	（2020.6）
新型コロナ禍に見る不安の心理（4）	（2020.8）
新型コロナ禍に見る不安の心理（5）	（2020.9）
謝るということ（1）	（2020.10）
謝るということ（2）	（2020.11）
謝るということ（3）	（2021.1）
再び、コロナ禍の不安について（1）	（2021.2）
再び、コロナ禍の不安について（2）	（2021.3）
再び、コロナ禍の不安について（3）	（2021.5）
今さら聞けない「デジタル改革」（1）	（2021.8）
今さら聞けない「デジタル改革」（2）	（2021.9）
今さら聞けない「デジタル改革」（3）	（2021.10）
今さら聞けない「デジタル改革」（おまけ）	（2021.11）
「多様性」って何だろう？（1）	（2021.12）
「多様性」って何だろう？（2）	（2022.1）
「多様性」って何だろう？（3）	（2022.2）
「多様性」って何だろう？（4）	（2022.3）
「多様性」って何だろう？（5、とりあえず中締めです）	（2022.4）
ウクライナ侵攻、分からないこと（1）	（2022.5）
ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（2）	（2022.6）
ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（3）	（2022.7）
ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（4）	（2022.8）
ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（一旦、了）	（2022.9）
中国よもやま話（1）最大の貿易相手国	（2022.10）

中国よもやま話(2)西安の想い出	（2022.11）
中国よもやま話(3)幻の西夏王国	（2022.12）
中国よもやま話(4)諸葛孔明の夢	（2023.1）
中国よもやま話(5)現代の水滸伝？	（2023.2）
中国よもやま話(6)敦煌への誘い	（2023.3）
中国よもやま話(7)万里の長城	（2023.4）
中国よもやま話(8)遥かなる九寨溝	（2023.5）
中国よもやま話（最終回）好きやねん、上海	（2023.6）
心に染みる言葉（1）黒澤 明さん	（2023.7）
心に染みる言葉（2）池田 香代子さん	（2023.8）
心に染みる言葉（3）中村 哲さん	（2023.9）
心に染みる言葉（4）中谷 宇吉郎さん	（2023.10）
心に染みる言葉（5）丹羽 宇一郎さん	（2023.12）
心に染みる言葉（6）井上ひさしさん	（2024.1）
心に染みる言葉（7）ムヒカ元ウルグアイ大統領	（2024.2）
心に染みる言葉（8）李登輝さん	（2024.3）

分っているようで分らないこと？（2019.2）

西元善郎（竹の台）

現役の頃はまさに分別盛り、大概のことは分ったつもりでした。ところが、六十路も半ばを過ぎた今、逆に何も分っていないことが分ってきたような･･･そんな中で分らないなりにつらつら想いを巡らせています。

根っからの技術屋で政治の世界には疎く、「右翼」と「左翼」、「保守」と「革新」の違いなど、子供たちに聞かれてもうまく説明できないし、「リベラル」なども寛容と捉えれば分ったような気になるけど、情緒的で今ひとつよく分りません。実際、安倍政権は「××革命」などと称して随分と乱暴に「革新」的な施策を進めており、逆に野党は「保守」に徹しているようにさえ見えます。

一つの軸（価値観）で説明出来ないとしたら、ここは縦・横の二軸で考えてみましょう。思いつきですが、横軸に「富の分配」、縦軸に「政府の規模」をとってみます。つまり、左側ほど公平な分配となり、上方ほと大きな政府となります。この平面上では、自民は右上に位置し、立憲民主や共産は左上に立ち位置がありそうです。公明はどっち付かずで、一方、維新は米国の共和党チックに右下を志向しているように見えます。ここで不思議なのが左下に位置する陣営のいないことです。ここは無党派層が多いようにも見えるのですが、空想領域なのかな？かつて民主党政権時代、「事業仕分け」と称して予算縮減を目指しましたが、中倒れとなりました。それもそのはず、洋の東西を問わず、政治家・官僚にとって予算は利権の源泉であり、なかなか小さな政府に行きたがらない訳です。

ところが昨今、統計ビッグデータが蓄積され、人工知能の実用化が近づいてきており、高い税金を払って大きな政府を持たなくても、より公平な分配の仕組みが可能になりつつあるとも？そんな訳で、未開拓の「左下」領域、ある意味、日本国憲法が目指す自由公平社会を志す若者が増えてくることを陰ながら期待したりしているのですが･･･

時代逆行の背景分っているようで分らないこと（2）（2019.3）

西元善郎（竹の台）

忖度（実態は恫喝？）、公文書の改竄、自衛隊日報の隠蔽、統計データの虚偽、ありとあらゆるズルを重ねて「人柄が信頼出来ない」安倍さんが何故、今なお40％以上の支持を得ているのでしょう

か？海外でも、壁を造り、パリ協定やINF全廃協定からの離脱で息巻くトランプ大統領、経済合理性のないEUからの離脱を敢えて選択したイギリス国民、移民排斥の極右勢力が台頭する欧州諸国など、時代への逆行が目立つのは何故？子供に聞かれてもうまく答えられない現実・・・

こと細かに分析しても分りそうにないので、ここは数歩下がって、鳥の眼で歴史を俯瞰してみましょう。百年スケールで眺めると、世界は確実に、自由と人権の尊重、博愛、合理主義の方向に進んでいることが分ります。個人の尊厳が顧みられず、国家のエゴがまかり通っていた時代、迷信や偏見に満ちていた社会。それに比べると牛の歩みながら、日本国憲法が目指す自由で公平な社会に向っているのは間違いないことが分ります。

しかし、物事は一直線にはいかないようです。自由や人権が尊重されると何事も自分で選択しなければならないし、グローバル化が進めば、異質な者どうしがぶつかり合い、多様性を受け容れることが求められます。人の頭は省エネのために思考をショートカットするように作られており、思い込みが避けられず、誰もが合理的思考を出来る訳ではないようです。個人の尊重、博愛、合理主義の潮流に付いていけない人が出てくるのはある意味仕方なく、多くの人がストレスを感じ、結果として自分の頭で考えるのを諦め、かつてエーリッヒ・フロムが説いたように「自由から逃走」し、権威や目先の利権にすがることになるようです。

従って、そのような動きに対しては、一方的に批難、対決するのではなく、無理からぬ所以を理解し、暖かく受け留める寛容さが求められます。ここでも、日本国憲法が大いなる道しるべになると思います。

何故、戦争はなくならない？①分っているようで分らないこと(3)(2019.5)

西元善郎(竹の台)

戦争って集団的殺し合い。本来、戦争を好む人などいないはずなのに、有史来、馬鹿げた戦争を繰返してきたのは何故でしょうか？

そもそもの動機は財産？古代、農業が発達し余剰が出ると、お金持ちに財産が集まりました。当然、お金持ちは不安で堪らなくなり、「番犬」を雇います。それが武士や軍人が生まれてきた歴史的背景です。「国民の命と財産を守るため」という枕詞がよく出てきますが、元より、圧倒的多数の貧乏人には守るべき財産などほとんどない訳で、国民の命を犠牲にしてでも守りたいのは、他ならぬ支配階級の財産や既得権なんですね。その魂胆を覆い隠すために、国体や神、民族の誇りなど守るべきものがでっち上げられてきました。

二つ目の動機は武器？工業が発達すると武器もどんどん作られます。しかし、工業製品と違って武器は平時ではほとんど消費されません。従って、軍需産業にとっては、平和というのはあまり有難くなく、時々戦争が起こって、武器・弾薬が湯水の如く消費されるのが好都合です。戦後、律儀に守ってきた「武器輸出禁止」を安倍政権で反古にしたのも武器で儲けたい軍需産業の意を汲んだから？つまり、武器輸出国にとって戦争ほど美味しい話はない訳です。

戦争が止められない動機は人の心にも？人は、他者との優劣を気にする動物ですが、結果、劣等感が避けられなくなります。その裏返しとして、他者への根拠のない差別意識や優越感を求めてしまい、集団的な攻撃本能へと変身し、戦争に繋がっていきます。実は、ナチス・ヒットラーのユダヤ人に対する劣等感も凄まじかったし、日本人も、哀しいかな、西欧コンプレックスの裏返しで、中国人や朝鮮人への差別が先鋭化してきた歴史があります。

こう考えてくると、戦争の動機にはけっこう根深いものがあり、暗澹たる気持ちになります。でも、近年、戦争の動機に関する状況に少し希望が出てきたようです。この続きは次回に。

何故、戦争はなくならない？②分っているようで分らないこと(4)（2019.6）

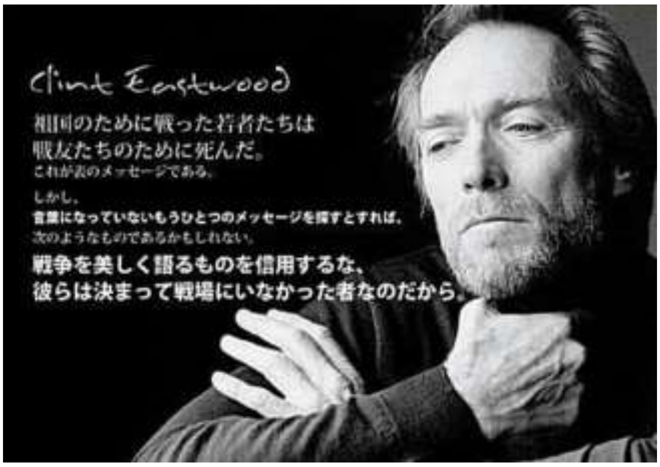
西元善郎（竹の台）

前回、戦争の動機はまことに根深いという悲観的な話をしました。お金持ちが財産や既得権を守るための軍備、有り余る兵器を消費するための戦争、そして、人の心にある劣等感の裏返しから来る攻撃性・・・ただ、21 世紀を迎えて、戦争が「あまりお得なものではない」という当り前の認識も芽生えつつあるようです。

まずは「弾の飛んで来るやばい所に誰が行くのか？」という素朴な疑問です。身分の差が明確だった古代、中世、そして、貧富の差が極端だった近代に比べて、現代は基本的人権が一応は尊重され、フラットな社会になりつつあります。だから、貧困から逃れ、飯を食うためにやむなく戦場に行く動機は薄れ、お金持ちが財産や利権を守りたいのなら貧乏人に不合理な危険を負わせず、「お金持ちの息子が行くべきだ」という当たり前のことに、人々はようやく気付きつつあるようです。

実際、アメリカ社会では、戦争を敬遠する若者が増えてきています。そこで、逆に社会格差を助長して貧乏人が兵隊に行かざるを得ない状況をつくる政策や「敵を憎く思わせるために」兵士を洗脳

する心理教育コースも開発されています。それでも、イラク戦争では米兵の半数がメンタル疾患に悩まされ、大きな社会問題となっており、もはや、米国が「自由と民主主義」を守るために、世界中で戦争を続けていく兵力を維持することは難しくなってきています。



そうすると、自然、同盟国の若者に肩代わりさせる流れとなります。米国コンプレックスが著しい安倍さんが、憲法違反を承知で、強引に集団的自衛権を推し進め、日本の国会で審議する前に、米国議会で協力を約束してきた背景がここにあります。自国のためならまだしも、米国のお金持ちの石油利権のために自衛隊の若者が駆り出されるのは哀し過ぎます。若い頃に従軍経験のある名優クリント・イーストウッドの言葉が胸に染みます。

何故、戦争はなくならない③分っているようで分らないこと(5)(2019.7)

西元善郎(竹の台)

お金持ちの財産や利権を守るための軍備、有り余る兵器を消費するための戦端、そして、人の心にある劣等感の裏返しから来る攻撃性など戦争には根深い動機があります。しかし、近年、戦争の抑止力も芽生え、前回、「弾の飛んで来るやばい所に誰が行くのか？」という素朴な気付きが戦争の歯止めになるというお話をしました。

今回は有り余る兵器について考えてみます。まず、ハイテクを駆使し、湯水のように開発費をつぎ込んだ結果、核兵器を初めとして、大量破壊兵器が「進歩し過ぎた」ことが背景にあります。もはや、兵器は敵方だけをやっつけるに留まらず、必ず味方にもブーメランで跳ね返ってきます。誰かが核弾頭のスイッチを入れれば、敵国から五月雨式に核弾頭が発射され、この地球を何千回も壊滅させるシステムになっているのです。ですから、余程のバカな指導者のいる国でない限り、大量破壊兵器は使えるシロモノではなく、既に「張り子のトラ」になり下がってしまっています。さらに、兵器技術の急速な進歩で、わずか数年前に開発した「新型兵器」がすぐに陳腐化し、使い物にならなくなる宿命にあります。特に、AI/無人兵器が開発される中でこの傾向は顕著になっています。実際、各国の軍事基地の格納庫には、当然のことながら、出番がなく、型落ちした兵器が所狭しと溜まってい

る訳で、そんな使いもしないものに多額の税金を注ぎ込むことが如何にバカバカしいことか、納税者は気付き始めているのです。

そのような背景のもと、アメリカでは、型落ちした兵器を同盟国に売りつけ、自国の納税者の不満を反らす策に出ています。安倍政権はトランプの意を汲んで新古版の F35戦闘機（1 機 147 億円）やイージス・アショア（防衛省公表は本体 2 機で 2,000 億円、実際は付帯設備含めて 6,000 億円超）などを言い値で買う物分かりの良い役割を演じていますが、日本の納税者がこのような政府の無駄遣いに気付くのも時間の問題と思われます。型落ち品であることに加え、安全保障上の制約で基本技術が移転されず、付け刃の整備技術に頼っており、演習時の事故が多いのも頷けます。

結局、これまでは何かと戦争の火種となってきた兵器が、納税者の経済合理的気付きによって、逆に戦争を抑止する方向に働き始めていることは皮肉ながら注目すべき流れと言えます。税金と国債など借金で賄われる国家予算が合理的に使われているか、そのコスト/パフォーマンスをウオッチすることは、平和を守る上でも国民の大切な仕事と言えます。

何故、戦争はなくならない？④分っているようで分らないこと（6）（2019.8）

西元善郎（竹の台）

お金持ちの財産や利権を守るための軍備、有り余る兵器を消費するための戦端、そして、人の心にある攻撃性など戦争には根深い動機があります。しかし、近年、「弾の飛んで来るやばい所に誰が行くのか？」「使えない兵器は税金の無駄遣いでは？」という素朴な気付きが戦争の歯止めになりつつあるというお話をしました。

今回は、人の心の奥底にある「劣等感の裏返しとしての攻撃性」について考察しようと思いますが、これは最も根深く、なかなか昇華する見通しは立っていません。第一次大戦で自信を喪失したドイツで、ヒトラーの経済復興手腕に酔い痴れ、独裁を熱狂的に支持したのはドイツ国民自身でしたし、英仏へのコンプレックスの矛先をユダヤ人に向け、残忍極まるアウシュビッツに手を染めたのも、普通のドイツ人でした。日本でも、日清、日露戦争から満州事変、日中戦争を経て、太平洋戦争に至る過程では、何も軍部だけが勝手に暴走したのではなく、「支那をやっつけろ！」という国民の熱い期待、強い支持があったのは残念ながら歴史の事実です。

　人の心に潜む攻撃性は、爬虫類由来の大脳辺縁系にあると言われており、類人猿以来発達した大脳新皮質の理性や協調性に抗って時に首をもたげます。駆引きや敵を欺く、寝首を掻くといった能力に優れ、政治家やワンマン経営者で異常に発達した人を見掛けます。女性も攻撃性と無縁ではなく、出産で大量に分泌される「オキシトシン」は我が子を慈しむ愛情ホルモンですが、よそ者には容赦なく排他的に作用します。人はそういう風に作られているのだから、角を突き合わせ、戦争に至るのは不可避だと悲観的にもなります。

　こういう時こそ、先の大戦後の真空状態で奇跡的に出現した日本国憲法の「不戦の誓い」を読返すとヒントになるかも知れません。

　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

数百年後の世界を見据えた何という先進的な宣言でしょうか！

　元々、米国から「押し付けられた」この憲法がある限り、米国のご都合主義による兵力下請けといった理不尽な要求も、信義に照らしてお断りすることが可能です。やたら、戦争をしたがる人達からこの国を守るとっておきの切り札なのです。
（右上写真中の文字は「ワイマール憲法が死んだ日（1933年3月23日）」）

庶民の心に響く言葉を探し求めて（1）（2019.12）

西元善郎（竹の台）

　11 月 20 日に歴代最長となった安倍政権は虎視眈々、改憲を狙っています。改憲への執念は不気味なほどです。目下、参議院では「改憲」勢力が 2/3 を下回っていますが、野党議員を必要頭数一本吊りするなど、利権を独占する政権にはたやすいことでしょう。そうなると、次はいよいよ国民投票ですが、安倍政権としても国民投票で却下されるのは致命傷なので、シンクタンクを起用して頻繁に世論の動向を探り、国会発議のタイミングを伺っています。

　一方、憲法に対する国民の関心は、暮らしに直結する景気や福祉、年金に比べて低く、改憲のヤバさを実感していない人も多いようです。大雑把には安倍改憲の賛成層、反対層が各々20％程度なのに対して中間層は 60％もあると言われており、改憲、護憲、双方にとって中間層の囲い込み如何で国民投票の帰趨が決まります。

そこで、改憲サイドでは北朝鮮や中国、ロシアとの緊張を背景に「憲法9条で国が守れるか」と恐怖心を煽るとともに、災害復旧で頑張る姿から 90％超の好感度を得た自衛隊に対して「いつまでも宙ぶらりんでは可哀想ではないか」と言った「情緒に訴える運動」を進めています。

自民党の憲法９条改正案

第9条の2
（第1項）前条の規定は、我が国の平和と独立を守り、国及び国民の安全を保つために必要な自衛の措置をとることを妨げず、そのための実力組織として、法律の定めるところにより、内閣の首長たる内閣総理大臣を最高の指揮監督者とする自衛隊を保持する。
（第2項）自衛隊の行動は、法律の定めるところにより、国会の承認その他の統制に服する。
※第9条全体を維持した上で、その次に追加

一方、護憲サイドではどうでしょうか？主に、憲法学者や専門家が、安保法制が憲法違反であるとして安倍改憲の危うさを訴えています。先日の和田進神戸大名誉教授の講演でも自衛隊が9条2項に追記された時に、自衛隊基地運用や土地収用法、武力攻撃事態での問題点、戦後堅持されてきた国民の権利、自由への制限の危機が解説されました。専門的には確かにその通りですが、率直な所、庶民にはイマイチぴんと来ないように感じました。よく分らない内に、圧倒的財力と大手広告代理店のノウハウによるCMで改憲ムードに流される国民投票の光景が目に浮かびます。

護憲サイドも庶民の心にシンプルに響く言葉を紡ぎ、発信する時ではないでしょうか？例えば、城山三郎さんの「自衛隊が憲法に書かれたら、軍人はやがて威張り出すだろう。そして権力にすり寄る。武力を持つ者が権力まで握ったら、世の中おしまい」と言う言葉には暗黒時代を生きた人ならではの実感があります。「9条で国が守れるか」という改憲派の殺し文句に対して、「9条は、やたら戦争をしたがる輩からこの国を守るためにある！」も強烈なカウンターです。菅原文太さんの「政治の役割は2つだけ。民を飢えさせないことと絶対に戦争をしないこと」というメッセージはまさに心に響きます。古賀誠自民党元幹事長の「憲法9条は世界遺産」も保守政治家ならではの重い言葉です。

今後とも、庶民の心に響く言葉を探し求めて津々浦々から発信していければと思います。

庶民の心に響く言葉を探し求めて（2）（2020.1）

西元善郎（竹の台）

安倍改憲の賛成層、反対層が各々、20％程度なのに対し、意思を持たない・示さない中間層は 60％もあると言われています。国民投票になった場合、この中間層が帰趨を制する訳で、本稿では中間層の人々の心に響く言葉を探し求めています。先日、西神ニュータウン 9 条の会のつどいで関西学院大の冨田先生のお話を伺いましたが、まさにこの中間層について世論調査等に基づいた具体的な分析がなされ、とても心強く拝聴しました。

冨田先生の分析によれば、中間層のある部分は旧民主党政権発足時に一度目覚めたが、その後、野田さんや前原さんの自滅を機に幻滅した人々（以下、幻滅層）、一方、中間層の過半は全世帯の 3 割を占める「貯蓄ゼロ世帯」が中心で（以下、貧困層）、「政治に関心をもつゆとりさえ奪われた人々」との分析でした。従って、各層の実情に合わせたメッセージを発信することが肝要となります。

まず、幻滅層は状況次第で再び覚醒し、投票率を 20％上げる潜在能力を持つそうです。しかし、この幻滅層に「アベ政治を許さない！」等と呼び掛けても、かつての民主党政権の頼りなさが焼き付いており、「代わりがいないこと」を見透かされています。実際、各種世論調査でも安倍政権支持の最大の理由は一貫して「人柄は信頼できなくても他よりもマシだから」です。また、この幻滅層は基本的に保守的で必要に迫られるまでは動かない傾向があります。ですから、幻滅層に対しては「戦後、何とか穏やかにやって来られたのに、何故敢えて 9 条を変えて波風を立てるの？」「米国から押し付けられた 9 条だからこそ、米国に No と言える唯一の切り札！」といった現状維持的メッセージが心に響きやすい気がします。

一方、貧困層はどうでしょう？貯蓄（貯金、保険）ゼロということは財布のおカネだけで暮らし、日給ベースでは連休が続くと収入が減り、子供には日に一食しか食べさせれない、病気になっても病院に行けない、そういった貧困層が全世帯の 3 割という格差の現実。しかも、貧乏になったのは自分がだらしなかったからという空気が蔓延し、「助けてほしい」という声さえ上げられず、今日の御飯を心配している人々に憲法の話をしても聞く耳を持てないのは当然です。だから、国民投票になれば、政権サイドは「目先のアメ戦術」で貧困層を囲い込むでしょう。では、我々はどうする？従来のように「無関心が長期政権を許している」「怒りを込めて投票に行こう」といった上から目線の呼び掛けだけでいいのでしょうか？れいわの山本太郎の「生きづらさに寄り添うメッセージ」にヒントがありそうとの冨田先生のコメントはなるほどと思いました。

庶民の心に響く言葉を探し求めて（3）（2020.3）

西元善郎（竹の台）

憲法を順守し、象徴としての責務を誠実に果してまいりたい・・・

安倍改憲の賛成層、反対層が各々、20％程度なのに対し、意思を持たない・示さない中間層は 60％もあると言われています。国民投票になった場合、この中間層が帰趨を制する訳で、本稿では中間層の人々の心に響く言葉を探し求めてきました。僕は、何故か護憲派の方々よりも、自称改憲派や中間層の友人が多く、居酒屋などで9条改憲の是非について時々議論になります。改憲派の友人からは例によって威勢よく「憲法9条で国の安全が守れるなら誰も苦労しない」論や「日陰の自衛隊員が可哀想」論、さらには「護憲派は冷戦

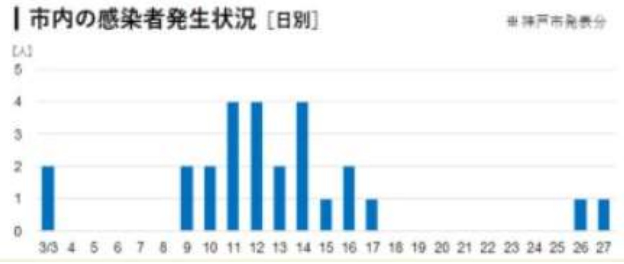
後の変化に付いて来られない時代遅れ」論が出ますが、中間層の友人にも分りやすく説得力があるようです。こちらが勉強したての安倍改憲の憲法学的な矛盾を説明しても専門的過ぎるのか、大体劣勢に立たされます。北朝鮮のミサイル騒ぎ等があるとなおさら、心情的に旗色が悪くなります。

　困った時、僕は「安保条約で平和が守れたというのは幻想」論を投げ掛けます。「日本と韓国は米国とそれぞれ安保条約を結んでいる。でも、韓国はベトナム戦争で米軍に次ぐ規模の韓国兵を下請けとして送り込み、多くのベトナム人を殺し、殺され、憎まれ役をやらされた。イラクでも然り。一方、日本の自衛隊は一人のベトナム人もイラク人も殺さず、殺されず、恨みっこなしに来られた。同じ安保体制下でのこの違いってどこから来ていると思う？」それは「韓国には申し訳ないけど、日本にはたまたま『憲法9条の重し』があって、韓国にはないから・・・。」これに対しては、さすがの改憲派も真っ向からは否定出来ないようですが、こういう時は話題をすり替えて「でも、自衛隊ってどこから見ても軍隊だろう。外国もそう見ている。その現実に対して憲法が歪んでいていいの？」

　折角、戦後史を掘り起こして日本が平和にやって来た背景を力説しても、軍事力の現実を持ち出した改憲派の説明に中間層はなびいてしまうようです。そこで、苦し紛れながら僕が最後に切り出すのは「今、改憲などに浮かれていていいの？」論です。日本は少子高齢化が進み、経済は縮小均衡。東京五輪の公共投資・特需も終わり、さらに消費税増税で消費が冷え込んでつらいけど厳しい時代が待っています。「そのように国民が苦しんでいる時に浮ついた9条改憲を持ち出す人間性が信じられない・・・」生活感に訴えたこの説明には、中間層は大いに賛同してくれます。改憲派さえも「確かにそうやな」と頷いてくれます。最後は「戦後75年、何とか平和にやって来られた。難しいことは抜きにしてお互い、変な波風は立てないでおこうな」ということで意気投合、いいお酒になります。

新型コロナ禍に見る不安の心理（2020.4）

西元善郎（竹の台）



　中国の武漢で昨年末に始まった新型コロナウイルス肺炎は欧州に広がり、米国でも猛威を振るっています。日本では手洗い、マスクなど固有の清潔文化が奏功しているようで、今の所、小規模感染で持ちこたえていますが、ピークを抑え、医療崩壊を防げている分、逆に、数か月単位の長期化の懸念も出始めています。そんな中、クルーズ船対応で後手を取った安倍首相は危機感を募らせ、「見えない敵との困難な闘い」を強調、専門家会議や政権内でさえ異論のあった全国一律休校まで要請しました。一番冷静であるべき人が浮足立ったためか、国民にも不安感が伝わり、「しばらくの辛抱」と萎縮やイベント自粛の動きが加速し、近隣では西区民センターも休

館、9条の会の記念のつどいも延期を余儀なくされました。例によってマスコミも不安を煽り、マスクや意味不明のトイレットペーパーの買い占め騒ぎも発生、パニックの様相を呈してきています。

人類は古来、疫病や災害に直面したとき、怯え、パニックを起こしながら反射的に難を逃れる行動を取ってきました。近代でも、関東大震災の朝鮮人虐殺も官憲や民間自警団のパニックによるものでした。しかし、現代は世界の情報が瞬時に入手でき、データに基づいて合理的に判断出来ます。新型コロナも各国の感染者数、死者数、感染ルート等が日々公表され、致死率は 2～4%、同じコロナ系の MERS(35%)、SARS(10%)に比べて毒性は弱く、感染しても 8 割は軽症で済み、やみくもに恐れる必要はありません。また、国内の年間死者 136 万人の内訳で、がん 37 万人、心疾患 21 万人、通常の肺炎 9 万人、自殺 2 万人等と比較すると、新型コロナは死者(現在 60 人強)が不幸にも 1,000 人に達したとしても通常の肺炎(9 万人)のばらつきに過ぎないとの冷静な受留めも出来ます。

しかし、これらは統計や確率の話です。確率は多数回試行した時の平均値であり、一方、人生は一回きりなので、不安心理の中では人々は「確率はそうだろうけど、次は自分の番かも知れない」と悲観的に考えがちです。街の気分もどんどん萎縮、自粛に傾き、ストレスが溜まり、頼りの免疫力を損なうとともに、経済活動や信用の収縮が不可避となります。内部留保のある大企業は別として、中小零細企業がまずしんどくなり、非正規社員やシングルマザーなど社会的弱者はますます困窮し、下手をすると新型コロナで亡くなるより、首を吊る人の方が多くなるような悲惨な事態も想定されます。政府は不安を煽る非常事態云々より経済政策を優先すべきです。それも総花的ではなく、新型コロナとともに「首吊り」から人々の命を救うための即効性ある生活支援が待ったなしとなります。
（右上グラフは神戸市内の感染者発生状況）

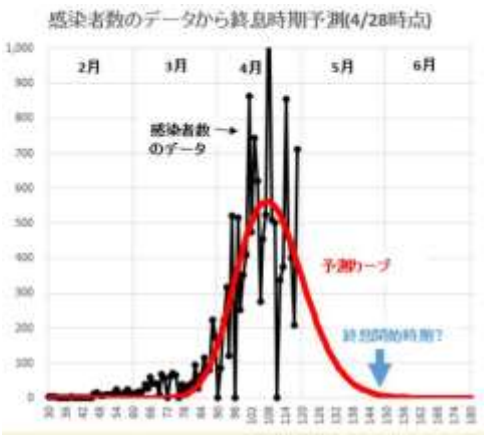
新型コロナ禍に見る不安の心理(2)(2020.5)

西元善郎(竹の台)

新型コロナは峠を越えたとは言え、依然、予断を許さず、3 月初旬から2か月近くも窮屈な暮らしを強いられています。前報では、IT の普及で感染リスクを定量的に把握出来るようになって過度に恐れる必要はないのに、いざ自分の命に関わると統計や確率は当てにならず、不安が募る一方との話をしました。今回は、コロナ報道が溢れ、食傷気味にも拘らず、実は、国民の知りたいことを政府や専門家が語らず、何より「いつになったら終息してくれるのか？」見通しが示されないことが不安を一掃募らせている話をします。

感染症については、100 年前のスペイン風邪を契機に、SIR モデル(S:免疫のない人、I:感染者、R:免疫のある人の間の微分方程式)が確立され、医学と数理科学の両面から研究されてきました。集団免疫やワクチンが出来るまでは隔離や接触低減しか手がないということで、接触低減で感染爆発を抑え込むグラフを見られた方も多いと思います。これを提案した専門家会議の西浦北大教授は「何も対策を取らなければ、85 万人の重症者が出て 42 万人が死ぬ」と警告しました(4/15)。しかし、この説明が腑に落ちた人はどれ程いたでしょうか?もし、先生の警告通り、本当に膨大な死者が出るのなら、政府は自粛を国民の意思に委ねたりせず、休業補償とセットにして徹底して取り組むべきなのに、何故か現実は「要請」に留まっています。あの警告は机上の空論、いやブラフだったのでしょうか?また、PCR 検査件数が諸外国の 1/10 以下と極端に少ない理由についても納得出来る説明はありません。人の命より五輪開催を重視して検査を「自粛」した小池知事の話はさておき、検査をたらい回しにされた人が院内感染につながってきているのに・・・。

今、国民が最も不安に思うのは先が見通せないことです。緊急事態の 5/6 解除は悩ましそうですが、それならいつ頃?もちろん、PCR 検査データは偏りも多いし、終息は国民の自粛努力にも左右されるので見極めが難しいのは分りますが、それなら、ざっくりとでもいいから「あとどれくらい堪えればいいのか」心積りを専門家は発信すべきです。それでこそ「あと**か月、皆で堪えよう」と頑張れます。素人の僕でも藁を掴む気持ちで終息見通しを探っています(図をご参照下さい)。元々ぎりぎりの生活の上、コロナ禍で米櫃も底をつき、首を吊りかけている人々がコロナの重症者にも増して多くいることに専門家の先生は想いを馳せて戴きたいです。政治家の先生には遅くとも宣言解除予定の 5/6 までには首を吊りかけている世帯に漏れなく現金を届けて戴きたいです。「迅速に」とか「全力で」とか御託を並べている間に、主要先進国では配布済みです。



新型コロナ禍に見る不安の心理(3)(2020.6)

西元善郎(竹の台)

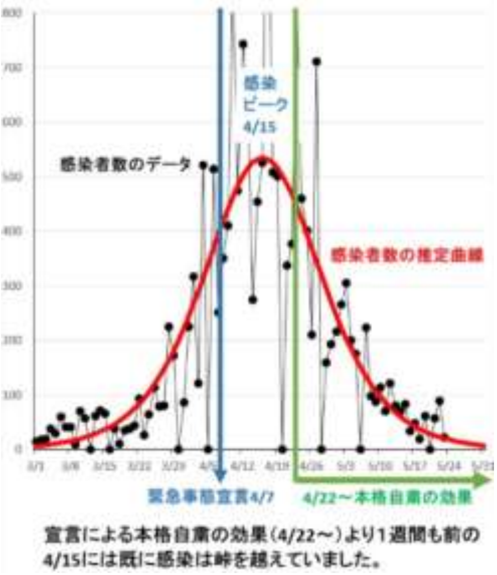
お蔭様で我が国では当初心配されていたほどの爆発的な蔓延には至らず、緊急事態宣言も5月中に解除されました。5月下旬の終息開始を予測していた僕としても、大外れがなくて安堵しています。しかし、これで元の暮らしに戻れる訳ではなく、第2波到来に備えながらの「新生活」には不安が伴います。とりあえず終息モードに入ってきたのに、なぜ不安なのでしょうか?

それは、爆発的蔓延に至らずに済んだ本当の理由(山中伸弥教授によれば FactorX)が未だに分っていないことが背景にありそうです。本来、一番冷静であるべき首相が舞い上がってしまって、根拠の乏しい全国一律休校や給付金での混乱、先進国の 1/10 にも満たない PCR 検査、無駄の極みのアベノマスクなど目も覆いたくなるような失策続きなのに欧米に比べ被害が少なくて済んだ、その理由は何なのでしょうか？

FactorX の一つ目は BCG 説です。BCG は結核ワクチンですが、長年接種してきた台湾や韓国でも被害が少ないことから説得力があります。ただ、途中の世代で接種を打ち切ったイスラエルで世代間に感染有意差がないことから BCG で全てを語るのは無理みたいです。
二つ目は既存免疫説です。日本やアジア諸国では中国との交流が多いため、以前より免疫が蓄積されてきたという仮説です。武漢で最初に蔓延が起きた理由が説明しにくいのが難点ですが、早晩、抗体検査によって明らかにされるでしょう。
三つ目は欧米に比べて毒性の低い種が流行しているという仮説です。100 年前のスペイン風邪の頃と違い、今日ではウイルスは電子顕微鏡で直接観察出来て既に 5,000 種も見つかっており、いずれ明らかにされるでしょう。

その他諸説ありますが、実はそんな難しいことではなくてアジア人の清潔文化と慎ましさが歯止めになっているのかも･･･？欧米ではパンを手で掴むのに食前に手を洗う習慣が少ないし、おしぼりも見かけません。路上で汚れた靴のままリビングどころか寝室にまで入る感覚は理解出来ません。

ネパール通の島田さん談では、爆発的蔓延のインドの隣国ながら感染被害の僅かなネパールでは一日に何十回も手を洗う習慣があるそうです。



右図の赤い推定曲線を見て気づかされるのは、専門家が 4 月下旬から現れると強調した「接触8割減」など本格自粛の効果を待つまでもなく、4 月 15 日には感染が峠を越えていたという奇妙な事実です。つまり、日本人らしく清潔に暮らしておれば、8割自粛など無理をしなくても感染爆発は起きないことを物語っています。

第一波は誰も分らなかったため過分の用心もやむを得なかったのですが、いつまでも影に怯えていると「角を矯めて牛(経済)を殺す」ことになりかねません。

新型コロナ禍に見る不安の心理(4)(2020.8)

西元善郎(竹の台)

第一波が５月末に収束したのも束の間、また感染者が増え始め、「第二波だ」「東京では第一波を上回った！」とマスコミが騒いでいます。その東京ではPCR検査人数が４月と７月で９倍も違い、４月は重症者すら検査待ちだったのに、最近は集団検査で無症状者からの陽性者掘り起こしまで行われています。母集団が異なる数字なのに、名だたるマスコミが恥ずかし気もなく単純比較する？統計を勉強していたら、こんな無意味な比較は慎むはずですが・・・

一方、専門家の先生方からも悲観的なメッセージが目立ってきています。7/6、8割おじさん西浦教授との対談で山中教授は「対策をしなければ、10万人以上の死者が出る可能性がある」と指摘されました。ノーベル賞科学者の鋭い直観でしょうが、問題は、山中教授が根拠となるデータを示されていないことです。４月の西浦教授の「接触を８割減らさないと42万人亡くなる」発言でも国民にも分る根拠が示されず、どこで話が食い違ったのか、未だに検証されていません。危機管理では最悪の事態を想定するのが鉄則だし、安全サイドの発言ほど無難という気持ちも分ります。でも、根拠を示さない「可能性発言」は、有識者であればあるほど、人々を不安に陥れるだけで百害あって一利ないことを僕たちは学びました。

さて、7/19の朝日新聞・世論調査で、緊急事態宣言を再び出すべきか問われ、実に65%の人が「出すべき」と回答、「出す必要がない」25%を遥かに上回りました。先行き不安な時期には、国民自身、緊急事態宣言を待ち望む気分があり、自粛の要請に対しても唯々諾々と従います。そして、従わない人を白い目で見、つま弾きにさえします。この凄まじい同調圧力、薄気味悪くないですか？

再び宣言が出ると、当然、休業要請と補償はセットでなければなりません。でも国庫も自治体の米櫃もほぼ空です。安倍さんは自分が恵んでやっているようなつもりで補正予算の大判振舞いをしますが、これは紛れもなく、孫やひ孫の代からの前借りなのです。因みに経済損失規模は、阪神大震災10兆円、東日本大震災（原発事故を除いて）19兆円に対し、コロナは第一波だけでも50兆円（GDP10%）と推定されています。補正予算230兆円といっても真水は50兆円で何とか第一波の穴埋めにはなりそうだけど、こんなことを繰り返していたら本当に我が国は破産してしまいます。「みんなで怖がっていたら大丈夫」は大きな勘違いで、高齢者や基礎疾患をもったコロナ弱者を手厚くガードする一方、国民一人一人がデータを冷静に見て「リスク・ゼロの安心料」が如何に高くつくかを自覚し、いささかの胆力をもって処していくことが求められています。（右上写真は滋賀の梅花藻—バイカモ、筆者撮影）

新型コロナ禍に見る不安の心理（5）（2020.9）

西元善郎（竹の台）

７月に入り、新型コロナ感染が再度急増する中、山中伸弥教授「対策を打たないと間違いなく10 万人が亡くなる」、岡田晴恵教授「あと2週間で医療現場が大混乱に陥る」など厳しい見通しが飛び出し、人々が再び萎縮し始めました。そこで、「いろんな見方があれば少しは不安が和らぐかも」との気持ちで、第一波と同様の方法を用いて「7月末～盆休みにはピークを越す。下り坂は緩やかで収束には多少時間がかかりそう」と予想させて戴きました。途上国でもエクセルが使える方なら、自国の流行予想を試して戴ける論文も公表しました。「感染症の難しい知識がなくても使えて便利」と好意的な声も戴きましたが、「専門家でもないあんたに何が分かる？」「一度減っても今後爆発しないと何故言い切れる？」とお叱りも頂戴しました。

8/20 の感染症学会のシンポで尾身先生が「全国的にはだいたいピークに達したと見ている」との認識を示され、今回も予想に大外れがなくて良かったと胸を撫で下ろしております。「コロナの流行は国民の自粛努力に左右されるはずなのに、ピークのずっと以前からどうして予測出来るの？」とよく聞かれますが、1億の大群衆の清潔習慣や人との間合いの取り方は一朝一夕に変わるものではなく、努力は当初からのデータにさり気なく織り込まれていて、日本人らしい生活をしておれば、緊急事態とかステイホームとか取り立てて騒がなくても早晩収束するということのようです。

7/29、立憲民主党の枝野代表は「自分だったら、東京に緊急事態宣言を出す」と力説されましたが、率直に言ってメッセージに奥深さを感じませんでした。国民生活に犠牲を強いつつ膨大な経済損失を出してまで宣言に踏み切る状況か、同党には異論の出せる政策スタッフが不在なのでしょうか。より緊要なのは、共産党の志位委員長が強調されている「地域を特定したPCR 検査の整備と陽性者の保護」です。高速・高精度の PCR 検査体制が整えば、医療現場で患者さんをたらい回しして院内感染につながる愚も防げるし、イベント会場でもその場確認で心置きなく楽しめます。陽性者の保護も重要で、本来が被害者の感染者を加害者の如く扱う社会は断じて許せません。西村大臣は「戦略的に検査体制を充実する」と得意顔で回答されましたが、データも示さず不安を煽るだけの著名人が迷惑ならば、誠心誠意とか戦略的とか言った空念仏だけの政治家も有害です。コロナを機に「国民の命を守りつつ経済を痛めないために、今年 X 月までに所要 YY 分の高速検査装置を全国 ZZZ 箇所で稼働させる」といった結果をコミットする政治に転換してほしいものです。
（右上写真は六甲森林植物園の長谷池（拡大）、筆者撮影）

謝るということ（1）（2020.10）

西元善郎（竹の台）

西神中学の校門に写真の標語が掲示されています。

「ごめんなさい」言える勇気と許せる心

法務省の「社会を明るくする運動」の一環で、西区の保護司会で選ばれた標語とのこと。僕は散歩の道すがら、目にする度に「何とも響きの良い標語やな」と感心しています。同時に、この言葉を贈りたい人がいたような気がするのですが、それが誰なのか、なかなか思い出せませんでした。最近、安倍首相辞任のニュースを見て「この言葉を贈りたかった人は安倍さんだった」と思い当たりました。

以前、阪急庄内駅から母が入院していた病院に向かう途中、建設が中断された「瑞穂の國記念小學院」の前をよく通りましたが、立派な建物がこのまま朽ちるのはもったいないというのが関西人の率直な気持ちでした。森友問題はご存知の通り、戦前回帰の教育を目指す森友学園に共鳴した総理夫人が名誉校長に就任、それが契機になったのか、国有地がただ同然で払い下げられ、大阪府からの補助金も楽々パスし、物議を醸しました。ここまでは権力者にありがちな「身びいき」だったのですが、2017 年 2 月、国会で追及された安倍さんが「私や妻が関係していたら、総理大臣も国会議員も辞める」と大見得を切ったことで急に雲行きが怪しくなりました。直後から、財務省で関係書類の廃棄や改ざんが行われ、改ざんに苦悶した近畿財務局職員の自殺まで起きました。財務省の調査では、総理に忖度した官僚が「勝手に」公文書の廃棄や改ざんに手を染めたとの理由で 20 名が処分される一方、関係者 38 名全員、不起訴に終わりました。しかし、忖度といった生やさしいことで人は死んだりしません。背後に「恫喝」があったのは十分想像できる所以です。

あの時、安倍総理が「ごめん、ちょっとやり過ぎた！」と謝っておれば、財務省ぐるみで公文書改ざんの犯罪に手を染めることも、自殺者を出すことも、時給の高い国会議員が時間を浪費することもなかったのです。佐川さんも国税庁長官に昇進したものの僅か 9 か月で退任、キャリアの有終を捻じ曲げられた被害者の一人だったかも知れません。まだ全貌が明らかになった訳ではなく、また、菅政権も、今の所、経緯を顧みる勇気はなさそうですが、加計学園、さくらを見る会を含め、いずれ歴史が解き明かすことでしょう。安倍さんは史上最長政権を率い、持病があったにも拘らず、彼なりに努力もし、立派な人でしたが、人間として最低限の「ごめんなさいと謝る勇気」を持ち合わせていなかったのは、潔さを旨とする日本人としてまことに悲哀を感じざるを得ません。国民は「許せる心」を持っていたのに･･･

謝るということ（2）（2020.11）

西元善郎（竹の台）

ニュースでよく見かけますが、「不祥事」を起こした企業の責任者が雁首並べて謝罪する姿が恒例になっています。この 10 年間でも、不適切会計でオリンパス（2011）、東芝（2015）、スルガ銀行（2018）、品質関連でタカタ（エアバッグ不具合）、東洋ゴム（免震データ偽装、2015）、三菱自工、スズキ（燃費詐称、2016）、神戸製鋼（品質データ改竄、2017）、かんぽ不適切販売（2020）など枚挙にいとまがありません。いずれも社長さんが神妙な顔をして平身低頭、「皆様にご心配とご迷惑をお掛けし、申し訳ございません」と謝罪します。そして、「『再発防止』に全力をあげます」と判で押したような決まり文句を垂れます。でも、この種の謝罪会見はいつ見ても、何となく空々しい印象が残りますね。何故なのでしょう？

実は、僕もある会社を担当していた時、新製品で欠陥が出てしまい、お客様のつるし上げを食らったことがあります。社内の叡智を集め、連日徹夜で調べましたが、原因がなかなか掴めません。「いつ対策出来るのか？」と矢の催促を戴く中、客先に出頭し、「申し訳ありませんが、原因系には 3 つの可能性が絡み合い、つぶすのに各4か月要しますので最長 1 年かかり、すぐの再発防止は無理なんです」と正直に釈明するしかありませんでした。「この期に及んで 1 年？」、ハリ倒される覚悟でしたが、僕の言葉が真に迫っていたからでしょうか、お客様は渋々1年の猶予をくれました。結果、2 番目の原因がヒットして 8 か月で解決出来ました。工場でも人身事故が起きると、工場長が飛んで来て「すいません。直ちに再発防止策を打ちます」と釈明しますが、『直ちに』『再発防止』と言った途端、形だけの対策しか考えていないことがバレます。何故なら、根の深い原因が絡み合うからこそ事故が起きる訳で、すぐに思いつくような対策で済むなら本来、事故は起こらないからです。

死者 107 名の悲惨な JR 福知山線事故（2005）も、事故調や裁判で過密ダイヤや運転士の日勤教育など懸命に議論されましたが、実はカーブを急にしたのに ATS（自動列車停止装置）が未設置でした。カーブの曲率と速度から遠心力が求まり、車体が浮く条件は高校物理でも計算出来るのに、何故 JR は運転士の注意力だけに頼り、fail-safe の ATS 設置を指示しなかったのか深い闇に包まれています。本来がコンプライアンス（法令）違反、つまり企業犯罪なのに『不祥事』『不適切』『不具合』といった曖昧語でオブラートに包む風潮は原因に向き合っていない証左です。本当の原因が掴めていないのに、口先だけの「再発防止策の徹底」などおこがましい限り･･･だから空々しい謝罪会見になります。

謝るということ（3）（2021.1）

西元善郎（竹の台）

古今東西、謝るのが苦手な人種は官僚のようです。昔、企業の研究所で国家プロジェクト(国プロ)に取り組んだことがあるのですが、期限が来ても目標2性能の一つが未達成でした。そこで、正直に「失敗」という報告書を提出したのですが、霞が関から出頭命令が来ました。「失敗」を怒られると覚悟して臨んだのですが、あに図らんや「報告書の書き方が悪い」と。こういうのは「概ね成功」と書くのだそうです。躊躇すると「俺たちの顔をつぶす気か」と。でもこれを続けると、殆どの国プロは「概ね成功」となり、やるべき研究テーマがなくなってしまいます。

難しい言葉で恐縮ですが、「官僚の無謬性」と言うそうです。一例としてコロナの PCR 検査の遅れの原因を考えてみましょう。コロナが流行し始めた3月は東京五輪開催が至上命題だったため、政府も都も感染規模を抑えたい、従って検査を推奨しない意向が働きました。しかし、延期決定後は、検査を増やして実態を掴むのが緊急課題のはずが、民間臨調(*)によると、厚労省が「行政検査による検査権と既得権益の維持」、つまり省の論理を優先させたため「目詰まりを起こした」そうです。さらに、厚労省の主張通りに推進しようとすると、今度は実行部隊の保健所が、この 30 年で 45%も減らされてきた現実が浮上しました。つまり、「誤りを謝らない」ため一貫性がなくなり、検査後進国になり下がってしまった訳です。

しかし、貧弱な検査でパンデミックと闘うのは羅針盤なしで航海するようなものです。第一波で PCR 検査が行き届かず、感染者数を極端に少なく見積もったため、「致死率＝死者数／感染者数」が跳ね上がりました。結果、国民に「恐ろしい感染症」の先入観を植え付けてしまったのが今日の経済停滞に繋がり、罪は深いです。未だに医療や介護施設での院内感染が多いのも、検査のタイミングを失した院内たらい回しが一因です。厚労省も判断ミスを率直に認め、検査体制の再構築に邁進してほしいですが、当時の加藤厚相(現官房長官)は「概ね成功」でごまかすことに汲々としていましたね。

ついでながら 20 世紀、社会主義国が軒並み失敗した一因も、実は、前衛政党や政府官僚の「無謬性」神話にあったそうです。「何故失敗をしたか？」は「何故成功したか？」より教訓に満ちているものです。「人は間違いを犯しやすい」という当たり前のことを謙虚に受け容れ、「失敗」を貴重な経験値として一つずつ磨いていくのが、社会制度の如何に拘らず、原点のはずなのですが･･･

(*)新型コロナ対応民間臨時調査会・調査検証報告書：p.50(2020)

再び、コロナ禍の不安について(1)(2021.2)

西元善郎(竹の台)

首都圏に続き、京阪神でも二度目の緊急事態宣言が出ました。NHK の世論調査では国民の大多数が待ち望み、むしろ「発出が遅過ぎた」という声が 79%も占めています。怖い気持ちは分かりますが、圧倒的多数が「自由の制限を容認」するのは少し薄気味悪いですね。どうも背景には底知れぬ「不安」があるようです。ウイルスや変異種の蔓延はもちろん怖いですが、それにも増して「不安」の蔓延による人々の気持ちの萎縮が半端でないように思われます。

そこで、コロナにまつわる「不安」の源と、「不安」を少しでも和らげるものの見方を探し求めて添付の拙論（「感染の広がりの推定（ver.3）」）にまとめました。ただ、日本では PCR 検査も抗体検査も数が少なく、それを補うために小難しい数式を用いた結果、不評を戴きました。黒木先生の近著「新型コロナの科学」によれば、数式を使うと読者は指数的に減る由。本稿では数式を使わず、分かりやすく議論したいと思います。

まず、右表に示す通り、日本では欧米に比べて、感染者数も死者数も桁違いに少ないのに、なぜこれほどまでに新型コロナが怖がられるのか？一言で言えば、PCR 検査が行き届かないため、感染の広がりが見えにくいからです。見えない「不安」ほど怖いものはありません。昨春の第1波では、症状の重い人とその周辺しか検査されず、「実際の感染者は公表の 10 倍か 20 倍か、誰にも分からない」といった専門家の発言もあって、疑心暗鬼の広がったのが「不安」の第1の源です。これと関連しますが、「致死率＝死者数／感染者数」なので、PCR 検査が行き届かないと、分母の感染者数が過少にカウントされ、致死率が過大に公表された、これが「不安」の第2の源です。全年代で 5.6%、80 歳以上は 30%超（3 人に1人が亡くなる）と言われれば、誰しも心穏やかでおられません。それに拍車を掛けるメディアの「過去最多！」の連呼、これが「不安」の第3の源です。「感染者数」は検査範囲を広げれば増えるもので、検査数が 10 分の1だった過去と単純に比較しても意味はありません。マスコミは統計を無視した報道をして人々を過度に怖がらせ、社会の公器としての矜持を失ったのでしょうか？

新型コロナの比較　（'21.1.25）

	人口10万人当り	
	感染者数	死者数
米国	7,682.4	128.2
英国	5,448.0	146.2
フランス	4,788.4	112.6
日本	289.8	4.1
韓国	148.3	2.7

1918-20 年のスペイン風邪で蔓延した「不安」こそ、10 年後の世界恐慌、さらにはヒトラーを歴史の舞台に呼び込み、第二次大戦に人々を駆り立てていった遠因であったことを想えば、「不安」の深層心理が暴走する兆候を注意深く見守っていく必要があります。次回では、拙論に沿ってエビデンスをもとに、「不安」のからくりを検証していきたいと思います。

再び、コロナ禍の不安について（2）（2021.3）

西元善郎（竹の台）

前回、国民の大多数が緊急事態宣言を待ち望み、自由の制限を容認するほどの気持ちになってしまう「不安」の源を分析し、1)感染の広がりが見づらいこと、2)致死率が高そうなこと、3)メディアの過熱報道の3点を挙げました。そして、拙論「年代別の死者数統計に基づく感染の広がりの推定」では、新型コロナを正しく恐れ、不安を少しでも和らげるために感染の広がりの可視化を試みました。

感染の広がりとは感染者数の合計です。感染者数をカウントするために PCR 検査をやっているのですが、現実には厚労省の歪んだ方針で検査が行き届かず、尾身先生が危惧されていたように、かなりの人々が「サイレント」感染者として市中に埋もれている状態が続いてきました。公表された感染者数だけでは信用出来ないのです。そこで、致死率の定義「致死率＝死者数／感染者数」に立ち戻ることになります。この式は変形すると「感染者数＝死者数／致死率」と書けます。ここで、分子の死者数はお医者さんの死亡診断に基づくものなので信用出来ます。従って、分母の致死率さえ分かれば、本当の感染者数、つまり、感染の広がりが見えてくる訳です。新型コロナの致死率を知るには、2009 年に流行し、国立感染症研究所で詳細調査された新型インフルエンザの致死率が参考になります。もちろん、ウイルスの種類が違うので不確かですが、昨年 6 月に東京、大阪、宮城で実施された抗体検査の結果を用いて不確かさを低減し、感染者数の妥当な範囲を推定することが出来ました。

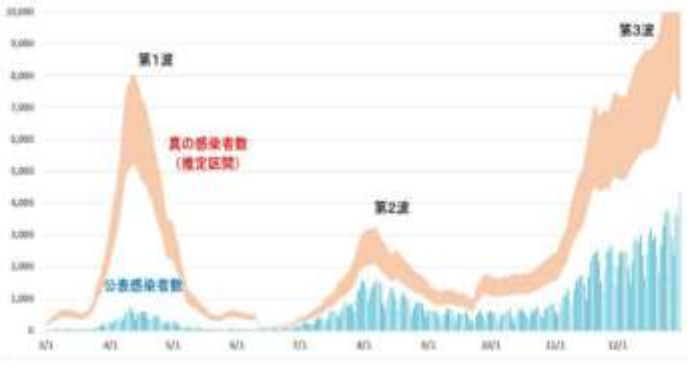


図 9 第1～3波における公表感染者数と真の感染者数（推定区間）の関係

その結果、意外なことが分ってきました。右図に示す通り、第1波では公表感染者の実に 8～13 倍ものサイレント感染者が市中に埋もれ、それらが第 2～3 波の種火となっていったと強く示唆されることです。また、公表を大幅に上回る感染者がいたことから分かる通り、80 歳以上の高齢者でも致死率は公表値（30%）ほど高くはなく 8%程度、つまり、運悪くコロナに罹っても、十中八九は助かるということです。70 歳代では 2%、60 歳代では 0.6%、50 歳未満の生活世代に至っては、0.01%未満でゼロに近い致死率です。それにも拘らず、見かけの過大な致死率や個別の著名人の症例で「怖い感染症」を強調して、人々の暮らしを委縮させてきたメディアの責任には重いものがあります。また、朝日からNHK、産経まで似たような報道姿勢なのも気掛かりです。第1波の頃は情報が少ない中、手探りの報道は仕方なかったかも知れませんが、1年たってもなお、各社各様に読みを入れようとせず、表面的な数字に頼る報道ぶりには、社会の公器としての矜持を疑いたくなります。

ご関心がおありの方は下記研究会のホームページをご参照下さい。
https://science-research.p-kit.com/page0002.html

再び、コロナ禍の不安について（3）（2021.5）

西元善郎（竹の台）

4/24、念願の池内了先生講演会＆二胡演奏会を何とか開催でき、胸を撫で下ろしています。それにつけても三度目の緊急事態宣言、コロナ禍には本当にイジメられますね。新型コロナは人間が恣意的に介入するため、株価予測などと同様、科学も苦手なのですが、それでも1年が経過し、少しずつ経験知も貯まってきました。当初、過度に恐れられたのは、PCR検査の不足で感染の広がりが見えにくかったためでしたが、民間臨調で厚労省の非科学的な方針が批判され、徐々に改善されてきました。

最近も面妖に思うことが多々あります。第1に待望のワクチンですが、右表の通り、後進国以下のお寒い進捗です。分刻みで列車を運行する几帳面なお国柄、ワクチン担当大臣までおられるのに、なぜ周回遅れなのか？「しっかり」とか「迅速」とか定性的な言葉ばかりが空回りして、納得できる説明がありません。第2は、ワクチン接種が遅れているのに、直近の新規感染者数が、接種が国民の半数に達した英国と同水準という不思議です。表の右欄外に感染者数を対比させていますが、ワクチン大成功と喜ぶ英国と、ワクチンが遅れ、第4波で大騒ぎする日本が同水準とはどういうことでしょうか？我々は自然免疫力や清潔な国民性に自信をもっていいのかも知れません。第3に、感染が下火になった英国と同水準なのに、なぜ「大変だ！医療崩壊？」なのでしょう？最近、コロナ病床を持つ大阪の病院長と懇談しましたが、医療崩壊の主因は、一旦確保したコロナ病床をケチって戻した府知事の見通しの甘さと私立系病院の非協力によるコロナ病床の絶対数不足との見立てでした。

自治体公表データを冷静に見れば、メディアが騒ぐほどには感染は急拡大せず、関西では宣言を待たず、既に峠を越えつつあるのが分かります。それにも拘らず、私権を制限し、暮らしや経済を苦しめる「宣言」を国民の過半が待ち望むのは何とも薄気味悪いです。そもそも「宣言」より桁違いに厳格な欧米のロックダウン（都市封鎖）ですら、感染抑制の決め手にならず、結局ワクチンに頼って

いる先行事例が多くあるのに、なぜそれらを学ぼうとせず、非科学的な施策にスガるのか、分からないことばかりです。

確かに変異ウイルスは得体が知れず、僕自身も正直、怖いです。でも、それにも増して怖いのは、人々の闇雲に恐れる気持ちそのもののような気がします。施策の効果を見極め、ワクチンの助けも借りながら、この不安心理を冷静に見つめられるようになったときに初めて、コロナ禍の本当の終息が来るのではないでしょうか。

今さら聞けない「デジタル改革」(1)(2021.8)

西元善郎(竹の台)

ご承知の通り、菅政権の目玉政策として今年 9 月にデジタル庁が出来ます。「デジタル庁って何？」「オンライン申請、性に合えへんなあ」と思われている方も多いと思います。今さら聞けないデジタル改革についてこっそり振り返ってみましょう。

ご記憶の方もおられるでしょうが、かつて 2000 年森政権の「e-Japan 戦略」で申請手続きの電子化が、2006 年第1次安倍政権で行政サービスのワンストップ化が目標に掲げられました。そして、2013 年第2次安倍政権の「世界最先端 IT 国家創造宣言」でも再び行政のワンストップ化の 2020 年までの実現が目標になりました。3度も莫大な IT 投資をしてきた成果が図らずも今回のコロナ禍で試された訳ですが、PCR 検査の FAX による停滞、10 万円定額給付やワクチン接種の予約サイトの炎上をみると、21 年前の「e-Japan 戦略」の「申請手続きの電子化」ですら、満足に進んでいないことが浮き彫りになりました。で、再び「デジタル庁？」。菅政権の厚顔無恥に呆れますが、国民の我慢強さにも背筋が寒くなります。

情報通信(ICT)の普及で先進国のみならず、新興国でもデジタル化が劇的に進む中で、かつての電子立国、ロボットや自販機の普及では断トツの日本が、電話や FAX、キャッシュにしがみ付き、周回遅れの恥を曝け出しているのは何故でしょう？第1の理由は失敗を振り返らない政府です。「世界最先端の IT 国家！」と一見スゴそうで、実は事後検証が出来ない曖昧な目標ばかりです。しかも、お役人は失敗しないことになっているから「概ね順調」とごまかされ、ほとぼりが冷めると再び同じ看板を掲げる繰り返しです。第2の理由は我慢強い国民性が逆にアダになっていることです。ワクチン予約で何時間も電話を掛けさせられても、愚痴るだけです。お孫さんの声を聞くのと違い、予約電話は聞き違いがあるし、記録も残らないのでストレスです。FAX では、数字の転記という単調作業を何故黙々と頑張れるのか不思議です。キャッシュ、特に貨幣はコロナ感染しやすい

し、集金して銀行に持っていくのも手間です。国民が不便やコストを律儀に堪えている間にデジタル競争力は今や 63 か国中 27 位、韓国、中国、マレーシアの後塵を拝しています。

「スマホやネットはどうも・・・」という方がおられますが、それらは「手段」であって本質ではありません。失敗を反省しない政府に喝を入れ、国民自らも無駄な時間やコストを使わずに暮らすには、デジタルの本質を理解することが大切です。次回は、デジタルの「光」と「影」について振り返ってみたいと思います。

今さら聞けない「デジタル改革」(2)(2021.9)

西元善郎(竹の台)

便利な技術には光と影、メリットと弊害があります。そこで、「デジタル改革」について、メリットから振り返ってみましょう。「デジタルってよく解らんけど、桁表示の時計のこと？」と言う方がいますが、その通りです。デジタルとは数字の列、つまり「桁」の意味の「digit」(語源は「指」)に由来します。「桁」表示こそデジタルの本質です。従って、第1のメリットは、「桁」を増やすことで物事をいくらでも細かく表現出来ることです。もちろん測定誤差に埋もれるほど表示だけ細かくしても意味はありませんが、陸上 100m走でも、デジタル測定で 9.6 秒と 9.58 秒を区別できるようになったことで、記録ラッシュが続いている訳ですね。

第2のメリットは記録性です。数字だけでなく、文字も写真も映像、音声さえも数字の列の「桁」で表されるので、今日一日に起こったこと、人が発したメッセージなどありとあらゆる情報、つまり歴史が記録に残ります。しかも、数字の列なので、劣化せずに何回でもコピー出来ます。電子メールなら、1人に送るのも百人に送るのも手間は同じなので実感されていると思います。ですから、官邸への忖度、いや官邸からの恫喝で公文書をなかったことにしようとしても、証拠隠滅は所詮無理なのです。困ったことに(笑)、悪事を握りつぶせる時代ではなくなりました。
そして、3番目、デジタルの最大のメリットは「検索」です。スマホの検索エンジンで実感されている通り、世界中の最新情報をキーワードで瞬時に見つけ出せます。かつて、企業でクレームが起こった時、お客様から待ったなしの見解を迫られたことがあります。紙ファイルで保管していた部門は徹夜作業となったのに、データベース化していた部門は瞬く間に過去の事例が全て洗い出せました。クイックアクションで、お客様の満足度も「桁」違いによくなった経験があります。

デジタル技術とビッグデータを活用し、お客様目線に立って新たな価値を創る変革を、仰々しくデジタル・トランスフォーメーション(DX)と呼んでいます。コロナ禍を経て、国際的にも DX が大きな潮流となっており、企業でも DX の専門組織を設けて一生懸命取り組んでいます。「デジタル庁」に国民目線に立った価値の創出が可能か、またしても看板倒れに終わるのか注視していきましょ

う。今回はデジタルの「光」の部分を振り返りました。山高ければ、谷深し、次回はデジタルの「影」の部分について考えてみます。

今さら聞けない「デジタル改革」(3)(2021.10)

西元善郎(竹の台)

前回は、デジタル化のメリットについて説明しました。山高ければ、谷深し、今回はデジタル化のデメリット、影の部分について考えてみたいと思います。まず、第1はデジタル格差です。今回のコロナ禍でも、一斉休校でリモート授業になった時、自宅にネット環境がないため、置いてきぼりになった子供、ワクチンでネット予約出来ないために、何時間も電話をかける羽目になったご高齢のネット弱者など、デジタル格差が浮き彫りになりました。

第2は、個人情報の問題です。パソコンやスマホを使っていると、ちょっと関心のある広告が勝手に表示される経験があると思います。実は、検索キーワードやサイト訪問記録(クッキー)を通して、僕たちの関心事が筒抜けになっている訳です。企業ばかりではなく、警察や公安当局なども、必要に応じてネット上の個人情報を収集しています。監視カメラの台数は中国の2億台は別格としても、日本も 500 万台、知らない内に監視社会になっています。

第3は、「スマホ脳」と呼ばれていますが、特に若年層でスマホ依存症が知らず知らず進行していることです。僕たちの脳は数 10 万年の長い年月をかけて進化してきましたが、これほど情報漬けになったのは近年だけのことで、注意力散漫、不眠や鬱など深刻な事態が起きています。先程は個人の関心事が筒抜けになる話をしましたが、今度は一人一人の脳がハッキングされている状態と言えます。あるいは、最新のドラッグ(麻薬)かも知れません。こういう状態を見越して、アップルのスティーブ・ジョブズは我が子にはスマホは与えなかったそうです。

最先端技術は元々中立で、それ自体に罪はないのですが、デジタル化のデメリットの半端ないことが理解戴けたと思います。デメリットを上手に手なづけつつ、メリットを最大限引き出す知恵が求められます。例えば、台湾では、天才 IT 技術者のオードリー・タンがデジタル大臣として行政のオープン化を推進しています。公開できるあらゆる情報がインターネット上にあることで、官僚や大臣が何をやっているのか、何を考えているのかを全部知ることができ、人々が真の「国家の主人」になれるというビジョンを掲げています。新しい民主主義に向けて、隣国の実験を見習っていきたいものです。

今さら聞けない「デジタル改革」（おまけ）（2021.11）

西元善郎（竹の台）

前回は、デジタル化の弊害として、デジタル格差、監視社会化、デジタル依存症を取り上げ、解説しました。今回は、最近報道されたデジタル化の弊害のトピックスを2点、ご紹介したいと思います。

一つ目は、SNS（SocialNetworkingService）依存症に関する米国の話題です（出典：NY タイムズ）。facebook の元幹部が 10 月 5 日、上院公聴会で、同社が利用者を facebook 中毒になるよう仕向けてきた実態を証言したそうです。facebook 系の「インスタグラム」の利用者をつなぎ止めるためにどれほど巧妙にコンテンツを表示するか、利用後どれくらい自己嫌悪に陥るかを研究してきたのに、不都合な結果は隠してきたと。不安や落ち込みを感じやすくなった、10 代少女の 3 割が体形の悩みを悪化させた、自殺願望の原因の一つになっている・・・。以来、米メディアでは連日、この話題が取り上げられています。国の宝の子供たちがデジタル化の弊害に飲み込まれては未来も暗いですが、内部告発があるだけまだ救いかも知れません。日本ではほとんど無視されているようで、心配です。

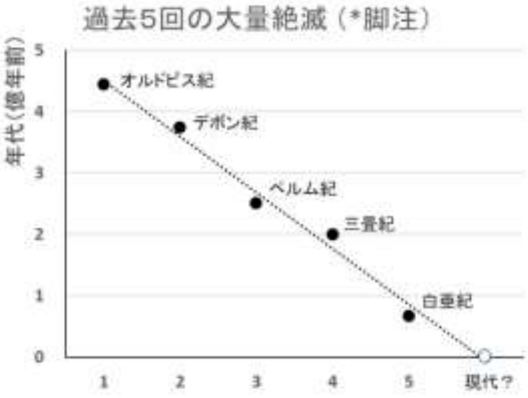
2つ目は日本の話題です（出典：Newsweek 誌）。Twitter に Dappi という常連の投稿者がいて、デマを交えて野党議員を攻撃することで有名です。国会中継中でも資料も交えて投稿する速報ぶりから、事前に国会質疑情報の入手可能な組織ではと怪しまれてきました。最近 Twitter 社への開示請求で、Dappi が法人運営され、取引先に自民党があることも分かりました。こういったデマ合戦は資金の優位な方が必ず勝ちます。もし、Dappi が自民党からの依頼によるものなら、政権与党が金を払って企業にデマを流させていたことになり、民主主義の理念を毀損するものです。Dappi の運営法人の意図はまだ不明ですが、状況証拠がある以上、実態は徹底的に解明されなければならず、日本にも健全な内部告発を期待したいです。特に、岸田内閣も憲法改正の構えを崩しておらず、国民投票時の資金にものを言わせたデマ宣伝は決しておざなりに出来ません。

今回取り上げたデジタル化の二つの弊害は、見かけは異なります。しかし、両方とも、デジタル化の便利さを享受する代償として、新種の弊害についても勉強を怠らず、目を光らせておけと警鐘を鳴らしているように見えます。

「多様性」って何だろう？（1）（2021.12）

西元善郎（竹の台）

最近、よく「多様性」という言葉が聞かれますね。英語では「diversity（ダイバーシティ）」です。「多様性」は、SDGs や LGBT、地球温暖化とも、そして、究極は日本国憲法や民主主義とも関係するらしく、いわば現代のキーワードと言えます。秋の夜長、「多様性」について静かに考えてみましょう。



「多様性」は元々、生態系の用語です。生き物は太古の昔に誕生して以来、巨大隕石の衝突、火山の大爆発、大地震、気候変動などで少なくとも 5 回の大量絶滅の試練に耐えて、命をつないできました（右上図）。5回目（6500 万年前）が巨大隕石のメキシコ湾衝突、恐竜の絶滅で有名ですが、実は3回目（2 億 5000 万年前）が最も過酷で、地球上生命の何と 95％が絶滅したそうです。それでも、命をつないできた切り札こそが種の「多様性」です。それまで栄華を極めていた種が環境激変で滅んでも、片隅でひっそり生きていたマイナー種がバトンをつないできました。

ダーウィンの進化論以来、種の「多様性」は風まかせの突然変異で生じるというのが定説でした。新型コロナの変異株も突然変異の一種です。でも、その後の研究で、生き物の涙ぐましい工夫が種の「多様性」を紡ぎ出していることが分かってきました。その最たるものが「有性生殖」です。それまでの単細胞生物の細胞分裂は親のコピーでしたが、有性生殖の場合、DNA のシャッフルで膨大な「多様性」が出来ます。例えば、ヒトの場合、親の 23 対の染色体で2の 23 乗通り、つまり各 800万通りの卵と精子が出来、さらに受精時に組換えも行われ、実に数 100 兆通りの多様な子供が生まれる仕組みです。いくら子だくさんでも一卵性双生児以外、絶対に同じ DNA の子供は出来ません（笑）。さらに最近の研究によると、生き物の「死」さえも寿命で仕方なく受け容れたものではなく、種の「多様性」確保の仕組みとして考え出されたものだそうです。それくらい「多様性」に神経を使ってきたんですね。

取って付けたような持続可能な社会 SDGs も、実は生き物から教わった深い考え方なのです。次回は「多様性」が活躍する多様な場面を見ていきましょう。

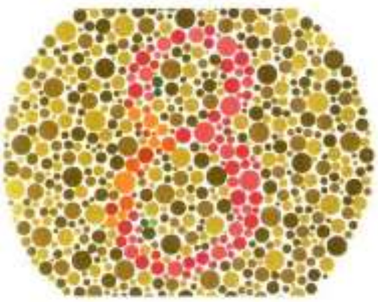
＊小林武彦「生物はなぜ死ぬのか」、講談社現代新書（’21 年 4 月刊）p.68

「多様性」って何だろう？（2）（2022.1）

西元善郎（竹の台）

前回は、生き物たちが「多様性」によって、5回もの大絶滅の危機を乗り越え、命をつないできた話をしました。今回は「多様性」が活躍する意外な場面をご紹介します。

まずは、色覚の話です。恥ずかしながら、僕は赤緑色盲です。当時の小学校では色覚異常の検査というのがあり（右図）、遺伝で決まっているのになぜか毎年検査され、「なんでこれが見えへんの？」、「あんたは色覚異常者や！」と先生から言われて子供心に傷ついた記憶があります。もちろん、信号の色は区別できますが、葉っぱに埋もれたサザンカの赤い花は見えないことがあります。ところが、最近の研究（脚注＊）では、ヒトの色覚には2色型や3色型があって、色覚多型、つまりある種の「多様性」であることが分かってきました。人類が安住の森からサバンナに出た際、いち早く獲物を見つけるのにも、猛獣から身を守るためにも、仲間に2色型が含まれている方が有利だったことまで示唆されています。獲物や猛獣の擬態に対しては見える色の数が少ない分、形や明暗に敏感な2色型の方が有利だったようです。「色覚異常者は、実は人類が生き延びるのにひと役買った？！」、まさに「多様性」ならでは、なんですね。



色覚異常の検査

次はジェンダーの話題です。従来、「男女7歳にして席を同じゅうせず」、外見だけでなく、気持ちの面でも、男らしさ、女らしさが意識的に強調されてきました。ところが、近年の研究によると、心身ともに性は連続分布しているそうです。連続しているものを線引きするのは無理があり、社会の片隅に追いやられていた LGBT が認識され始めたのも当然のことなのです。LGBT と言うと、僕はチューリング博士を思い出します。第二次大戦中、ナチスの暗号（エニグマ）を解読し、戦争終結に貢献した天才で、戦後はチューリング・マシンなど今日のコンピューターの基礎を作った人です。ところが、同性愛者（何と風俗壊乱罪！）との理由で逮捕、監禁され、41 歳の若さで自死しました。偏見が才能を摘んでしまった･･･わずか70年前の英国での出来事です。LGBT では美輪明宏さんやロバートキャンベルさん初め、抜き出た才能が目立ちますが、それは男女の紋切り型に収まらない多面的な感受性と関係がありそうです。やはり、「多様性」の賜物なんですね。

＊河村正二・東大教授「色覚の進化」の研究；
https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/16/012700001/020500007/?P=4

「多様性」って何だろう？（3）（2022.2）

西元善郎（竹の台）

前報では、生き物たちが「多様性」によって大絶滅を乗り越え、命をつないできた話や「多様性」が活躍する場面をご紹介しました。今回は、逆に「多様性」の欠如がアダになる反面教師のお話をさせて戴きます。

まずはナチスの話です。1933 年に「民主的」に政権を取ったヒトラーはワイマール憲法の痛恨の穴＝緊急事態条項を悪用して、共産主義者、続いて自由主義者を排除、ユダヤ人を追放し、「偉大なアーリア人国家」を宣言しました。アインシュタインやノイマンなど著名なユダヤ系科学者も相次いで米国に亡命、ドイツは「優れたアーリア人種」一色に純度を高めていきました。結果、12 年足らずで破滅しました。無知も甚だしい優性思想＝「多様性」喪失社会が如何に脆いかは歴史が示す通りです。

これと似た話が戦前の日本です。大正デモクラシーの自由を謳歌していた時代は去り、1930 年代の昭和維新（5.15、2. 26事件）を契機に軍部が台頭しました。常に特高警察が目を光らせ、異論を言うと「非国民」扱いされ、白い目で見られました。鬼畜米英、隣人（朝鮮人、中国人）への差別、「多様性」なき大政翼賛社会はブレーキを失い、空襲、沖縄地上戦、そして原爆投下の悲劇までひたすら突き進みました。

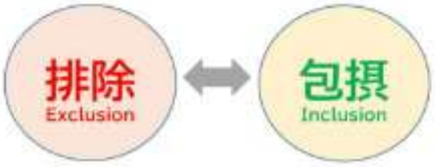
変な喩えですが、30個入り「柿の詰合せ」を想像して下さい。「粒揃い」の柿はどれもほぼ同じ時期に熟し、痛み始めます。一斉に腐るのです。一方、「不揃い」の柿なら、熟す時期も腐る時期もばらばらなので、長い期間楽しめるというものです。ナチスドイツや軍国日本と比べて、アメリカが優っていたのは自由と民主主義があったからと言われますが、もっとありていに言うと、日々、移民で新しい血が注入され、多様性が蓄積された社会であったということかも知れません（注1）。実は、古代以前の日本も、朝鮮半島や中国大陸、北方、南方から数千年間、幾波も移民が渡来しました。だから日本人は色白/色黒、毛深/薄毛、デブ/痩せ、いらち/気長など多彩なのです。そして、その結果熟成された「多様性」こそが日本人の強みかも知れません。

次回（最終回）は、組織やグループでの「多様性」を生かすために最近注目されている「包摂」（Diversity&Inclusion）の考え方について議論したいと思います。

（注1）私たちが「豊かな生き方」をするのに必要なもの／競争でも平等でもなく、多様化を！
https://www.huffingtonpost.jp/rootport/diversify_b_6039370.html

「多様性」って何だろう？（4）（2022.3）

西元善郎（竹の台）



「多様性」社会の岐路

これまで、生き物たちが「多様性」によって命をつないできた話、逆に「多様性」の欠如で、ナチスドイツや軍国日本が脆くも崩壊した歴史の教訓をご紹介しました。この教訓は社会主義国にも当てはまります。元々、抑圧された階級や諸民族の解放という崇高な理念を掲げながら、画一的なイデオロギーや官僚制で「多様性」が徐々に損なわれ、歴史の表舞台から消えていきました。今回は、これらの教訓から、「多様性」社会の岐路について議論したいと思います。

「多様性」の大切さは理屈では分かるのですが、気持ちの面では簡単にはいかないようです。グループで異なる意見や毛色の違った人が混じると、得てしてグループの居心地が悪くなります。典型例がネット上の集まり SNS で、自分と同じ耳障りのよい意見ばかり拡散され、異論が来ると袋叩きや炎上さえ生じます。私見ですが、これは生理的な作用かも知れません。例えば、オキシトシンは我が子や身内を慈しむ愛情ホルモンですが、よそ者には排斥ホルモンとして働きます。それで思い出すのが、2017 年、前原民進党代表と「希望の党」設立合意をした小池都知事です。突如、「安保・改憲」で従わない人を「排除」すると言い出し、民進党が分裂、結局、「希望の党」も短命に終わりました。最近も、「排除」を否定し、社会的「包摂」運動を推進しているはずの連合の芳野会長が共産党を含む野党共闘を「排除」すると表明し、政権に対抗できる塊を作ってほしいという市民の願いに水を差しています。

これと対照的なのが、2021 年総選挙の直前、絶妙に演出された自民党の総裁選でした。これまでのタカ派に加え、無派閥、ハト派の「幅広い」候補が立候補してオープンに論戦し、「多様性」をアピールしました。国民は、安倍政権以来のゴマカシ政治にうんざりしながらも、自民党の懐の深さに何となく安心感を覚えたはずで、この時点で自公政権信任という総選挙の流れは決まったのかも知れません。保守合同以来 70 年の長きに渡って政権を維持してきた自民党には、たとえ「利権」や「金権」が接着剤だとしても、ノウハウとしての「多様性」が備わっており、傾きかけると、宗教政党さえ抱き込む度量、「包摂力」があるように見えます。

一方、野党はと言うと、古くは社会党の左右対立、共産党の分派、最近では民主党の分裂に象徴される通り、「違い」に拘っての離合集散が繰り返されてきました。その結果、長期自公政権は緊張感を失い、かなりの国民は死に票と共に置き去りにされています。次回は、難問「どうすれば、日本でもドイツのように野党が包摂力を取り戻せるか？」を一緒に考えたいと思います。

「多様性」って何だろう？（5、とりあえず中締めです）（2022.4）

西元善郎（竹の台）

いよいよ本題「どうすれば、自民党政権に対抗できる野党の塊が作れるか？」に移ります。元より政治オンチの僕には、重過ぎるテーマでして、ここはたとえ話を通じて、皆さんと議論するきっかけになれば幸いです。

話が飛んで恐縮ですが、古来中国では、「羊」は寒さから身を守る羊毛や毛皮、栄養源としての乳と羊肉、そして、燃料の糞まで「大切なもの」の象徴でした。だから、羊が大きく育つと美しく、口々に「善きかな！」とほめ合いました。一方、今日の日本では、羊が「￥」(おカネ)に見える人が結構います(笑)。何しろおカネは万能なので無理なく価値観が共有出来ます。
これが、利権や損得を潤滑剤とする自民党政権の強かさの秘訣だと思います。

損得で結束する与党に対して、野党は弱者を助けたい、不正を許さないと「義」を重んじます。「義」は大事だけれど、声高に「正義」と言った途端、ある種の独り善がりがつきまといます。それもそのはず、「義」は羊の下に我と書くわけで、勢い「我が、我が･･･」となり、多様な意見や価値を認め合うことが難しくなりがちです。これが、何かにつけて野党が仲間同士でいがみ合い、求心力よりも遠心力が強く働く一因のような気がします。自民党は野党のこの「義」の弱みを熟知していて、自分たちがやばくなると、野党を仲違いさせるタネを蒔きます。野党は我こそ正しいと「義」を主張し、まんまと与党の策にはまり、与党は陰でほくそ笑んでいます。

でも、弱い野党が続くと、当然ながら、独り勝ちの与党も緊張感が損なわれ、パフォーマンスも落ちます。ガラパゴス日本列島に閉じこもっていると、実感は少ないのですが、現実に日本は、近年、急激に国際競争力を失ってきました。例えば、日本の平均賃金は OECD 加盟 38 か国中 22 位まで下がり、最近、韓国にまで追い越される始末。科学技術力の凋落ぶりも目を覆いたくなるほどで、お家芸の半導体や携帯電話の生産額はこの 20 年で半減、大学ランキングでも 200 位内は東大(36 位)と京大(54 位)の2校だけです。資源の少ない日本では人材こそ最も大事な財産ですが、教育への公的負担の GDP に占める割合は、OECD 加盟 38 か国中、何と 37 位、つまり日本という国は未来に投資しなくなったのです。この責任は、ひとえに安倍長期政権にありますが、それに代わる具体的な選択肢を国民に提示して来なかった野党にも応分の責任があります。

では、どうすれば、自公政権に代わる選択肢として野党の塊を形成できるのか？我こそ正しいという「義」がしんどいとしたら、それは何でしょう？僕は「共感」だと思います。「今だけ、カネ

だけ、自分だけ」で生き延びてきた人は上流階級とそのおこぼれにあずかれるごく一部であって、損得を越えて助け合いながら生き延びてきた人々がホモ・サピエンスの多数派だったのを思い出してもらうだけで十分です。ただ、「共感」はいささか情緒的なので、本田稔さんがよく言われていた中国の格言「求大同、存小異」、つまり、「小異を残して、大同につく」こそが具体的な行動指針だと思います。日本では「小異を捨てて、大同につく」と言う場合が多いですが、小異を捨てては、多様性を包摂出来ませんので、中国の格言に戻るべきでしょう。

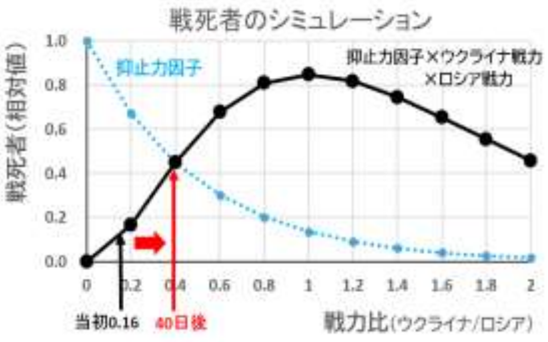
　それでは、参院選を 7 月に控えた現時点で、「大同」や「小異」って何でしょう？実は、自民や維新が親切にもヒントを教えてくれているのです。「政治理念が異なる勢力が共闘するなんて野合だ！」･･･そうなんです、見事な攪乱戦術なのです。実際、野党サイドでもこれを言われると、結構、まじめに考え込む人も多いですね。でも、「政治理念」って、いつから「大同」に昇格したのでしょう？諸問題の時間軸を具体的に考えれば気がつきますが、どういう理想社会に進むかは、もう少し智恵がついてからゆっくり議論すれば間に合う「小異」なのです。だから、楽しみに取っておけばよいのです。今、追求すべき「大同」とは、もっと差し迫った命に関わる問題です。貧富の格差が限界にきて、未来に自信が持てない衰退社会をもたらした自公長期政権、具体的には、持続的な人生設計が出来ず、生きづらい非正規雇用など新自由主義的施策をやめさせることです。この緊急の「大同」に対しては、ごくふつうの国民から、ごく普通にご賛同が戴けると思います。また、この「大同」を前にしては、政治理念など「小異」に過ぎないことはサルでも分かるでしょう。来たる7月、自民や維新、提灯持ちメディアにそそのかされず、「大同」の力強い潮流をつくるため、僕たち市民もそれぞれの立場からアクションを起こしましょう。

ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（1）（2022.5）

西元善郎（竹の台）

2 月 24 日にロシアのウクライナ侵攻が始まり、未だに戦禍が続いています。連日メディアでは、各国の政治家や専門家、さらには門外漢のタレントまで好き勝手にコメントしています。しかし、「プーチンはなぜ侵攻を始めた？」「いつになったら、戦火が収まる？」「なぜ多数のウクライナ市民が犠牲になっているの？」等について、明快な答えはどなたからも戴けていません。唯一確かなことは、今日も多くの犠牲者が出そうなことだけです。

「プーチンはなぜ侵攻を始めた？」「いつになったら、戦火が収まる？」は、複雑な政治力学がからむ問題で、理系 120%、政治オンチの僕には分かるべくもありません。同時代を生きる人間として無力感に苛まれます。ただ、「なぜ多数のウクライナ市民が犠牲になっているの？」については、一市民として関心を持たざるを得ません。そこで、ラフな考えで恐縮ですが、双方の戦力比と戦死者の関係のシミュレーションを試みました（右上グラフ）。まず、横軸にウクライナとロシアの戦力比を、縦軸に戦死者（相対値）をとってみます。直観的には抑止力因子の青破線で示す通り、ウクライナ戦力がゼロ（横軸＝0）の場合、ロシア軍の狼藉のままに戦死者が最大となり、ウクライナ戦力が増すに連れて抵抗ができて、戦死者は減ると考えがちです。「戦力不保持の憲法9条で国が守れるのか？」という素朴な疑問も同じ直観によるものです。でもよく考えると、戦死者は双方の戦力にも比例するのです。従い、実態は黒実線に近くなります。つまり、国家主権の尊厳を守れるか否かは別として、ウクライナ戦力がゼロの場合（横軸＝0）、そもそも攻撃対象のウクライナ兵や基地が存在せず、戦死者は出ようがありません。さすがのロシア兵もまるごしの市民は撃たないし、撃つ意味も全くありません。一方、双方の戦力が拮抗する横軸＝1 周辺では戦闘が激化すると共に長引き、戦死者が極大になるようです。

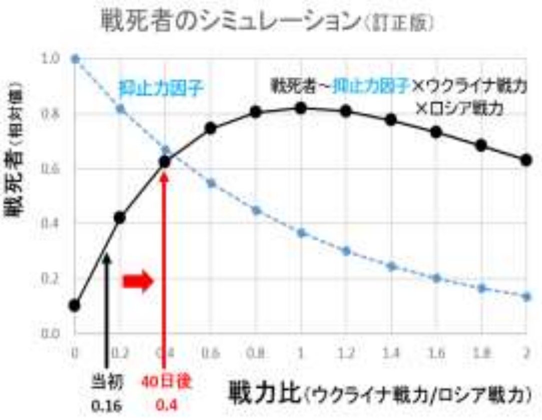


現実には、ウクライナは欧州で露、仏に続く軍事大国で、右上表から戦力を総兵力や戦闘機、戦車数等の平均で見積もると、侵攻当初のウクライナ戦力はロシアの 16%でした。従って、ロシアの侵攻に対してウクライナ兵による相応の反撃が行われ、0.1 程度の戦死者が発生した模様です。ところが、その後、NATO 諸国からの武器支援や市民義勇兵の参加もあり、最近はロシア戦力の 40%に達した模様です。その結果、ウクライナは善戦しているものの、兵士の戦死、市民の巻き添えも急増、当初の 4 倍超の 0.4 程度の戦死者が出ていると見受けられます。国を守るために懸命に努力した結果、逆に大量の犠牲者が出てしまう不条理をどう受け留めたらいいのでしょう？一方、日本は「平和憲法9条の重しをもつ奇特な国」との評判が既に世界中で定着しており、武器支援に加わっていないのは、薄情かも知れませんが、救われる気もします。次回はこの問題について掘り下げてみます。

ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ(2)(2022.6)

西元善郎(竹の台)

前回、ウクライナ侵攻での犠牲者規模が、ウクライナとロシアの戦力比とどう関係するかを数理的に考察しました。その結果、両国の戦力比が1に近づき、拮抗すると犠牲者が最大になること、つまり、国を守るために懸命に努力すればするほど、逆に大量の犠牲者が出てしまう不条理を指摘しました。その後、「月刊住職」誌 5 月号に「自衛として武器をとる是非」を寄稿された池内了先生と本件で少し議論する機会を戴き、ご指摘を踏まえてシミュレーションを訂正した結果を右記します。グラフは少し変化しましたが、両国の戦力が拮抗する時(戦力比＝1)に、犠牲者が最大になるという構図は変わっておりません。この考察を実証するかのように、志願兵の増加や NATO の武器支援も受けて戦力比がより 1 に近づく中、哀しいことですが、犠牲者は膨らむ一方です。



以上は、今回の侵攻の犠牲者規模を軍事力、つまり戦争の入力側から見たものですが、今度は戦争の出力側から見て、戦果／戦費比で俯瞰してみましょう。この侵攻がどう決着するかは神のみ知る、ですが、ケーススタディは出来ます。ウクライナから見た最善シナリオは「自国領土からロシア軍を一掃し、避難していた国民が元の生活に戻れること」でしょう。しかし、仮にこれが実現しても、殺されたウクライナ兵士は生き返りません。賠償金をいくら積まれても死んだ家族は戻ってきません。ただでも貧しい国なのに、荒廃した国土の復旧に GDP1年分以上の莫大なお金がかかります。一方、ロシアの最善シナリオは「出来ればウクライナ全土、少なくとも東部のロシア系住民が多い地域の独立」でしょうか。これが実現しても戦死したロシア兵士は戻ってきません。それだけでなく、ロシアという国は世界中で信用を失い、友達を失い、経済制裁で国民の暮らしも疲弊していくでしょう。おまけに、中立国フィンランドやスウェーデンまで NATO 陣営に追いやり、NATO との国境がかえって増えてしまいそう。長期的には、カーボンニュートラルで石油や天然ガスの価値が下がるのは必定、無駄に広大な国土を維持していくコストすらままならなくなるでしょう。莫大な戦費を費や

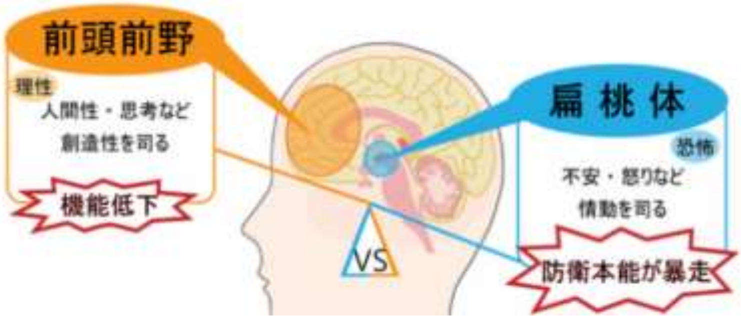
し、多くのロシアの若者を犠牲にし、国民に我慢を強いた結果、勝ち得たものは？プーチンさん、ご冗談でしょう！

　皮肉な見方で恐縮ですが、今回の侵攻は歴史上の無謀な実験をしているように見えてしまいます。短期には、プーチンの残忍なやり方に対して、世界の人々が不安におののき、軍備強化の風潮が高まるでしょう。しかし、中長期的には「大国が軍事力にモノを言わせ他国を侵略しても、もはや割に合わないこと」、何よりプーチンの悲惨な末路が歴史の教訓として世界の人々の目に焼き付けられることでしょう。そうなれば、どんなアホな指導者でも戦争を起こすのはもはや自滅行為と痛感し、軍備も自ずと減っていくでしょう。戦争がなくなれば、兵隊さん確保のために無理に貧困をつくり出すこと（命の値段を安く保つこと）も無意味になるでしょう。これは、楽天的過ぎる見方でしょうか？人間はもっとアホなのでしょうか？次回は、これまでの入力側（戦力）、出力側（戦果／戦費比）から見てきた理系的分析を念頭に、憲法9条のもつ歴史的先進性について考えてみたいと思います。

ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（3）（2022.7）

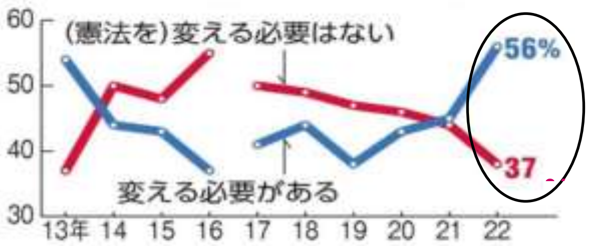
西元善郎（竹の台）

　前回は、ウクライナ戦争について、出口側から見た双方の戦費・戦果比をケーススタディしました。その結果、侵略されたウクライナはもちろん、「踏んだり蹴ったり」で悲惨なのですが、攻めたロシアさえも、数万に及ぶロシア兵の戦死、1日数兆円もの膨大な戦費、国際的孤立と経済制裁による国民の暮らしの疲弊など多大な犠牲を払って、全く割に合わない戦果しか得られないだろうことが明らかとなりました。なぜこんな馬鹿げたことがこの 21 世紀にまかり通るのか、今回、その要因を少し掘り下げてみたいと思います。
キーワードは「恐怖」です。恐怖を感じた時、人の脳では「大変だ！」とアラームを発する『扁桃体』と、「ここは冷静に！」と自制する『前頭前野』が綱引きをします。振り返れば、人類は幾多の災害や疫病、戦争に遭遇する中で扁桃体が敏感な『怖がり DNA』をもつ、つまり用心深い人が多く生き残ってきたようです。でもこれが高じると、右図のように、防衛本能が暴走する事態に陥ります。



以前、ロシア科学アカデミーの友人に、ニジニ・ノヴゴロドの独ソ戦勝記念公園を案内戴いた時、伺った話ですが、ロシアは、歴史上、フン族の民族移動、モンゴルの来襲、オスマン帝国の略奪、ナポレオンの遠征、そして独ソ戦と5度の皆殺しに遭い、『怖がり DNA』の特に優勢な民族となったそうです。異常な領土欲も、できるだけ敵を遠くに追い遣っておきたい気持ちの表れとか。そんな中、NATO の東方拡大がウクライナに及んできて、防衛本能が暴走したという見方も出来ます。ですから、ロシア国民は政府のプロパガンダに騙されているというのは皮相的な見方で、背景にはそう思い込みたい精神風土があるようです。でも、彼らにも前頭前野はあるので、冷静な「損得勘定」に戻る日もそう遠くないと期待したいです。『怖がり DNA』は北朝鮮のキム・ジョンウンにも顕著なようで、朝鮮戦争の敵国・米国がいつキム王朝をつぶしにやってくるか怯えたあげく、飢饉にあえぎながら、腹の足しにならない核開発を続けているのです。

一方、日本ではどうでしょうか。人の恐怖心につけ込むいじめやパワハラが根強いことから、やはり『怖がり DNA』が優勢な社会のようです。ですから、新型コロナが猛威を振るった頃、日本人の大半が緊急事態宣言を待望したのも頷けます。また、日々報道されるウクライナの戦争映像によって日本人の偏桃体に「怖がりスイッチ」が入ったのも間違いないでしょう。そのことは、今年の憲法記念日の世論調査で、「憲法を変える必要がある（青線）」が、右図の通り、一気に跳ね上がったことからも伺えます。



朝日新聞（2022.5.3付）

不安につけ込んでの軍拡や核共有の議論など、意図的な動きも出てきていますが、扁桃体の発する恐怖感からは、勇ましく軍拡を叫ぶ参院選候補者に手拍子で投票してしまいそうな気分があるのも分かります。一方で、ウクライナは欧州3位の軍事大国で、おまけに欧米の武器支援も受けているのに、長引く惨状や増加一途の戦死者を見れば、軍拡をしても国を守れるとはとうてい思えないと、冷静な前頭前野はささやきます。でも、憲法9条で国が守れるほど単純な話でもなさそうです・・・それならば、どうすれば国を守れるのか、正直、僕には分かりません。そこで次回は「国を守る」って、そもそもどういうことなのか、原点に立ち戻って考えてみたいと思います。

ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（4）（2022.8）

西元善郎（竹の台）

西神中央駅前で、「憲法9条を守ろう！」と呼びかけていると、通りがかりの方からよく言われるのが、「あんたら、憲法9条で国を守れると本気で思っているの？」というきつい言葉です。「ロシアが攻めてきたら、どうすんねん？」と不安な表情を浮かべながら。残念ながら、僕には、彼らに安心してもらえるような答えを持ち合わせておらず、「そうかも知れませんね・・・」と頭を抱えます。でも

防衛費を倍増したら大丈夫かというと、それも怪しい。なにしろ、ウクライナは欧州3位の軍事大国で、欧米の最新鋭の武器支援も受けているのに、兵士だけでなく多数の市民も犠牲になっているのが現実ですから。

「どうしたら国を守れるのか？（how）」、戦略的・技術的な話は軍事専門家にお任せするとして、ここでは、より根源的な疑問「守ろうとする『国』って、一体何なのか（what）」について考えてみたいと思います。手探りの中、池内了先生の問答集 1)が参考になります。守ろうとする『国』って、領土のこと？それとも、国民の命？いずれにしても守るべきは国の主権なので、憲法で「国の主権は国民」と定めている以上、守るべきは、国家とか領土よりも優先して「国民の命」になるはずです。政治家の演説でも、「国民の命を守る」という枕詞が繰返し登場しますので、多分、そうなんでしょう。

では、先の戦争で軍隊が守ろうとしたものは「国民の命」だったのか、乏しい知識で恐縮ですが、歴史の検証をしてみます。第1は沖縄戦。1945 年 3 月の硫黄島陥落後、3/26～6/23 の3か月間戦われた日本で唯一の地上戦で、兵隊さん 9 万、民間人 14 万の計 23 万人が戦死しました。内、沖縄県民は 12 万で、当時の沖縄県人口 49 万人の実に 4 人に 1 人が亡くなった勘定です。既に陸軍・海軍の主力が「本土決戦」に備えて本土に移った中で、「時間稼ぎ」として、民間人を巻き込んだ熾烈な戦闘でした。集団自決の強要を含め、残念ながら、どうひいき目に見ても、「県民の命」を守ろうとした軍隊ではなかったようです。

第2は満州での出来事です。僕の義父は応召して中国大陸を転戦し、敗戦後はソ連の捕虜になってシベリアに3年間抑留されました。相当つらい経験だったようで断片的にしか語ってくれませんでしたが、彼が満州で見た光景が参考になります。戦争末期の6月頃、ソ連が満州に侵攻してくるとの情報が入ると、当時、帝国陸軍最強と言われた関東軍は、「本土決戦に備える」とかの理由で、守るべき約 27 万の満蒙開拓民を置き去りにして、幹部から率先して本土に帰還したそうです。自分たち二等兵は逃げ遅れ、結局、シベリア抑留の憂き目に遭ったと・・・。ここでも、軍隊が自国民の命を守らなかったことは多くの小説やエッセイで描かれている通りです。

そして、第3は、「司馬遼太郎が考えたこと」2）で吐露されたエピソードです。司馬は満州の戦地から、本土決戦に備えて、栃木県佐野の戦車第一連隊に移った将校の一人です。そして、東京に上陸してくる米軍を迎え撃つため、栃木から戦車団が出撃する準備をしているとき、「東京から逃げてくる民衆で道が混雑したら、戦車が出撃出来ないこと」が大問題になった。熟議の結果、参謀本部の指令は「邪魔になる民衆は轢っ殺してでも、帝都に参上せよ！」でした。これを聞いて司馬は、「（やめた）と思った。日本人のために戦っているはずの軍隊が、味方を轢き殺すという論理はどこから生まれるのか？」「満州以来、お国のために勤めてきたけど、もうばかばかしくなった」と。

以上、3例をあげましたが、戦争末期、本土決戦が近づく修羅場での軍隊の振る舞いの記録、記憶は、掛け値なしに軍隊の真価を物語っています。つまり、軍隊というのは、必ずしも国民の命を守るものではないらしいという歴史の事実です。それならば、苦しいお国の台所から、いくら防衛費を積み増しても頼りになりません。

「いや、それは戦前のこと。戦後の自衛隊は心を入れ替えて、震災の時のように国民の命を守ってくれるはず」、「でも、敵の攻撃に晒される修羅場で本当かな？心を入れ替えた証拠は？」、「国民の命を守ってくれないとしたら、自衛隊員の命を犠牲にして、いったい何を守ろうとするのだろう？」疑問は尽きません。次回は、「軍隊が守るものは一体何なのか？」についてさらに掘り下げてみたいと思います。

1）池内了「ウクライナ侵攻を巡る問答集（1）」「月刊住職」2022 年 7 月号
2）司馬遼太郎「司馬遼太郎が考えたこと<2>」新潮文庫

ウクライナ侵攻、一日も早い停戦を祈りつつ（一旦、了）（2022.9）

西元善郎（竹の台）

前回は、太平洋戦争での3つのエピソードを交えて、沖縄でも、満州でも、そして、本土でも、帝国軍隊は日本国民を守ってくれなかったという歴史を振り返りました。一方、戦費は、当時の日本のGDP 比 33 倍、国家予算比で何と 280 倍という途方もない額でした。これほどの巨額を費やしたのに、国民を守ろうとした訳ではない？戦争末期、降伏か本土決戦かで揺れる御前会議で、某幕僚が「あと2千万の『特攻』を出せば、日本は必ず勝てます。日本男子の半分の命を差し出す覚悟で戦えば。1）」そこまでの犠牲を払ってでも軍隊が守ろうとしたものはいったい何だったのか？この基本的な疑念をどう受け留めればよいのか、一緒に考えてみましょう。

『あと2千万の特攻』、『一億玉砕』・・・狂気で済ますのは簡単ですが、それでは日本人 310 万、アジア人 2，000万と言われる戦争犠牲者が浮かばれません。よく言われるのは「国体護持」ですが、昭和天皇の無条件降伏のご聖断にも拘らず『一億玉砕』を標榜した軍隊は、天皇を差し置いて何を守りたかった？どうも「国体護持」という曖昧な言葉の背後に、当時のエスタブリッシュメント（戦争で得をしていた特権階級）としての「軍産共同体」があったような気がします。ありていに言えば、軍隊が最も守りたかったものは軍隊そのものだったのではないでしょう

か？ですから、戦争協力の名のもとに国民から搾り取った戦時国債を金塊にして東京湾に隠匿するようなことも、軍産共同体の維持のためだったようです。玉音放送に呆然と立ち尽くす国民を尻目にエリートだけで隠匿物資の山分けが行われ、市ヶ谷の陸軍省では、8/17-18 の終日、証拠文書焼却の煙の途切れることがなかったとの証言もあります2)。

　もうひとつは、進駐軍によって日本軍の武装解除が行われるのと同時に、早、軍隊復活の画策が始まっていた事実です。かの松本清張も亡くなる間際まで追い掛けていたそうですが、「服部機関」で再軍備計画が検討されていて、時の宰相・吉田茂が握りつぶしたとの記録があります。万死に値する蛮行を続けてきて舌の根も乾かない内に、再軍備？軍産共同体にとって利権は底知れず、戦争ほど美味しいものはなかったことが窺われます。今、進行中のウクライナ戦争でも、両国とも疲弊し切っているのになかなか停戦に至らないのは、両国のみならず、遠く米国の軍需産業の久々の活況があるようです。インドの TV 番組では、「ウクライナ戦争を愛するアメリカ」と揶揄されています3)。これほどの美味しさですから、朝鮮戦争を奇貨として、警察予備隊、自衛隊と実質的な再軍備が進んできたのも、武器輸出三原則が蔑ろにされたのも、さらに、防衛費急増で防衛装備庁に利権が集中してきたのも頷けます。

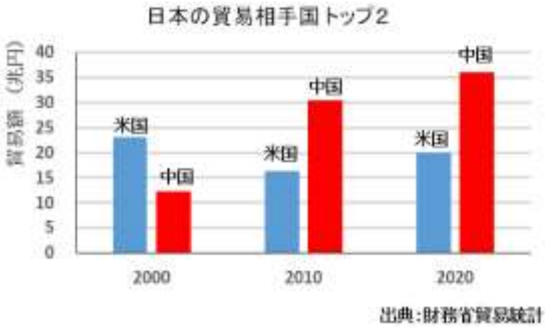
　とは言うものの、憲法9条があるお蔭で、日本の平和ブランドは一応、守られており、自民党政権と言えども、自衛隊、武器輸出、専守防衛のいずれでも、今の所、抑制的な政策が採られているのは、有難いことです。憲法9条の「重し」としての役割、米国からの無碍な海外出兵要求を断る「根拠」としての存在感は、今や、いぶし銀の輝きがあります。国会で「改憲勢力」が 2/3 以上を占める厳しい現実がありますが、そのような状況なればこそ、痩せても枯れても、憲法9条が「重し」として持ち堪えている健気さを国民に伝えていきたい。そして、自民党の改憲案が、あの反社会的カルト集団「旧統一教会」の改憲案（右図）と瓜二つであること、それはとりもなおさず、本稿で議論した「軍産共同体」復活を画策する流れに他ならないことを訴えていきたいと思います。さらには、改憲によって、圧倒的な武力をもつ実力部隊の社会的地位が上がり、防衛費が増加していくことで軍需特権の美味しい記憶が蘇ると、軍人と軍需産業が威張りちらし、平和を愛する市民がもの言えば唇が寒くなる時代がもうそこまで来ていることでしょう。

---

1)大宅壮一編／半藤一利著：「日本のいちばん長い日」（岡本喜八監督）2)貴志謙介（元 NHK ディレクター）：「戦後ゼロ年東京ブラックホール」
3)遠藤誉：「なぜ米国はウクライナ戦争を愛しているのか？」Yahoo ニュース

中国よもやま話(1)最大の貿易相手国(2022.10)

西元善郎(竹の台)



右グラフに過去 20 年間の日本の貿易相手国トップ 2 を載せています。中国は米国を抜き、今や、ダントツで、2020 年の対中貿易額は日本の全貿易額の実に 26.5%を占めています。実際、日本人の日々の食卓は中国に支えられているし、日本の企業(特に中小企業)にとって中国企業は最大のパートナーです。防衛面で依存している米国の顔色を伺うのも必要なことは理解出来ますが、我が国が加工貿易でなりわいを立てていく国であるからには、中国とも仲良くやっていくことが生命線となっています。

一方、中国の貿易相手国ランキングでは、日本は米国に続いて2位です。米中摩擦で米国との貿易の先行きが不透明な中、中国経済にとっても、日本と仲良くしていくことは核心的利益のようです。

相互経済依存が不可欠な中、政府間の外交が重要なことは言うまでもありませんが、民間における経済連携や文化交流も大切だと思います。僕はたまたまですが、現役時代、上海市政府や西安市の国立研究院、南京市の新興財閥、寧夏回族自治区の金属メーカー等とのビジネスや共同研究の機会がありました。そして、この 20 年で計 18 回も訪中し、多くの中国人の知遇を得ることが出来ました。日中合作が首尾よく運ぶと、心尽くしの宴席を設けて戴き、技術や研究の話に加え、古くは漢や唐王朝の歴史、改革開放の話題、最近は地球温暖化や原発事故など共通の関心事についても議論出来ました。僕の訪中時だけでなく、相手方が訪日された際も、先方の希望に沿って、京都案内や登山、温泉まで一緒に楽しみ、交流を深めました。

最近のメディアの論調では、米国からの風を受けてかどうか、ぎくしゃくの多い日中関係が演出されています。実際、僕も、香港での強権的な統治は好きになれないと感じている一人です。しかし、政治的な好き嫌いと経済的な共存とを切り分けるのが、大人の外交というものです。民間レベルでは、気心の知れたご近所どうし、結構愉快にやっていることを次稿でいくつか紹介していきたいと思います。

中国よもやま話(1)西安の想い出(2022.11)

西元善郎(竹の台)

18 回の訪中の半数は西安訪問でした。地図で見て戴くと分かりますが、西安は、中国のほぼ真ん中に位置します。最近は関空からの直行便もありますが、以前は福岡から上海経由でした。上海から見れば、西安より東シナ海をまたいだ福岡の方がよほど近く、中国が如何にデカい国か分かります。

西安は、昔は長安と呼ばれ、秦、漢、隋、唐など中国の歴代王朝の都がありました。唐代、長安は世界一の国際都市で、シルクロードを通じてローマともつながり、西方の人々や仏教、景教(キリスト教)、ゾロアスター教の寺院もあったそうです。日本の奈良や京都も長安をお手本にして碁盤目の平城京、平安京をつくった訳です。この唐代の国際都市の雰囲気を今に伝える漢詩で僕のお気に入りなのが酒豪だった李白の「前に一樽の酒有るの行(うた)」です。

胡姫貌如花	胡姫の貌(かんばせ)、花の如く
當壚笑春風	壚に當たりて、春風に笑ふ
笑春風舞羅衣	春風に笑ひ、羅衣を舞はしむ
君今不醉欲安歸	君、今、酔はずして安(いづく)にか歸らんと欲す

胡姫とは、西方から来た目の青い舞姫のことでしょうか。「壚に當たりて」とは酒場のカウンターと思われます。「君、今、酔はずして安(いづく)にか歸らんと欲す」などのくだりは、今でも、夜の街角で聞こえてきそうなセリフです。

この西安には国立の研究院があって、共同研究をしていたご縁で足繁く訪問しました。研究院の院長さんは、以前、日本の東北大学の助教授もされていた親日派で、科学技術のことだけでなく、文化、歴史などでお酒を酌み交わしながら話の花が咲きました。よく「上海やニューヨークはたった300 年、北京や東京は精々500 年、それに対して、京都は 1200 年、西安は 2300 年の歴史を持っている」と自慢げに話されていたのが記憶に残っています。

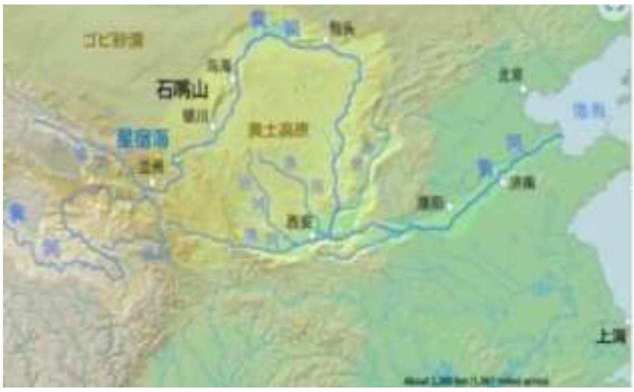
西安には、秦の始皇帝陵と兵馬俑、項羽と劉邦の「鴻門の会」跡、漢の高祖の長楽宮、空海の留学先だった青龍寺と大雁塔など多くの観光スポットがあります。その中で一番印象に残っているのは北東郊外の愛琴海温泉です。あの楊貴妃も入ったことがあると伝わる温泉で、いろんな風情の湯が楽しめ、中には、足の古びた角質を食べてくれる魚の泳いでいる冷泉もありました。少しくすぐったかったですが・・・。

さて、共同研究がうまく運んだとき、院長さんがお礼として、ミュージカル「長恨歌」に招待してくれました。「長恨歌」と言えば、白楽天の詩で、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋の物語です。これを、北京オリンピックの開会式の演出で有名な張芸謀監督がミュージカルに仕立てた作品です。愛琴海温泉の一角にある華清池と背後の山を舞台にした壮大なスケールで描く歴史絵巻で、無粋な僕でも感激しました。玄宗皇帝は、息子の嫁だった楊貴妃にひと目惚れしてしまい、国の政治もほったらかし。やがて安史（安禄山・史思明）の乱が起り、国は乱れます。玄宗皇帝は、文武百官に楊貴妃の処罰を薦められ、迷ったあげく、楊貴妃を死に追いやります。まさに「傾国の美女」。でも、エンディングの「比翼の鳥」「連理の枝」の演出は素晴らしかったです。（観劇記念に戴いた「長恨歌」の扇子）

1250年前にあったことを、実際にあったその場所で再現する・・・さすが中国は懐が深いです。

中国よもやま話（3）幻の西夏王国（2022.12）

西元善郎（竹の台）



前稿でご紹介した西安から黄河を遡っていくと、黄砂の源・黄土高原を越え、包頭、烏海を経て、銀川に至ります。銀川は 11 世紀に西域を制覇した西夏王国の都があったところで、現在は寧夏回族自治区となっています。回族とはモスリム（イスラム教徒）のことで、スカーフで顔を隠した女性や目の青い人も時折見掛けます。銀川をさらに遡れば、昨年 NHK-BSP で紹介された「星宿海」が広がります。そして、その向こうは広大なゴビ砂漠です。

現役時代、僕の担当していた会社では、超電導線（極低温に冷やすと電気抵抗がゼロになる夢の電線、病院の MRI 画像診断装置に使われている）を製造するために希少金属（レアメタル）が必要で、その入手のために銀川をたびたび訪れました。門司の工場で訪中の打合せの後、早朝、福岡空港をたって、上海経由5時間で西安、西安から空路1時間で銀川、さらに車で北へ 100km 走った石嘴山市の取引先に着くのはたいてい夜 9 時を過ぎます。それにも拘らず、先方の総経理（社長）以下みなさんがお待ちかねで挨拶の後、歓迎の宴が始まります。政治の世界では日中関係は何かとぎくしゃくしていても、やはり「朋有り遠方より来る、また楽しからずや」のお国柄でしょうか、心より喜んで戴けます。そして順番に白酒（バイチュー）で乾杯している内に、長旅の疲れもあってか、そのまま、酩酊状態となり、宿舎に転がり込むこともよくありました。翌朝、目を覚ますべくシャワーを浴びるのですが、以前は、まだお湯が安定に出ず、冷水シャワーで震えあがったこともありました。そして、いよいよレアメタルの価格と量、品質に関するタフな交渉。それが終わると、またまた午餐の宴席が用意されていて、二日酔いの上に白酒攻め。午後の交渉が終わると、また晩餐・・・。そんな交渉が数日続き、何とかまとまると、ご褒美に西夏王国の名跡に案内戴いたこともあります。

右は、西夏王陵と仏塔での写真です。記念に、ちょっと気取って「蔵書印」も作ってもらいました。この西夏王国については、ある伝説が残っています。青き狼チンギ

スハンは駆け出しの頃、西夏王国の王女にひと目惚れし、結婚を申し込みました。しかし、国王から「どこの馬の骨か分らん田舎者に大事な王女はやれん」と剣もほろろに断れました。「なにくそ」と歯を食いしばったチンギスハン、そこから八面六臂の活躍が始まりました。そして、東奔西走 20 年、ユーラシア大陸を制覇し、西夏王国も従え、晴れて、王女を娶りました。しかし、その頃には長年の労苦も重なってか男としてもはや現役ではなくなっており、老後の唯一の楽しみは、お気に入りの王女の入浴姿を眺めることだけだった由。

時は下って 1920 年、英国のスタイン調査隊がモンゴルで人の身の丈ほどの玻璃(はり)の壺を発掘、現在も大英博物館に収蔵されていますが、かの西夏王国の李睍公主のものと比定されているとか・・・。以上は、司馬遼太郎著『戈壁(ゴビ)の匈奴』に登場する伝説ですが、たかが男の底意地のために、ユーラシア大陸を駆け巡り、各地の数限りない人々を殺戮したとしたら、英雄とは何と大バカ者なのでしょう。それに比べれば、プーチンのような一時的バックラッシュはあるにしても、人類は着実に進歩しているのかも・・・寧夏回族自治区はそんな錯綜した歴史的気分が漂う土地柄でした。

中国よもやま話(4)諸葛孔明の夢(2023.1)

西元善郎(竹の台)

前々稿でご紹介した西安(長安)から南西の険しい秦嶺山脈を越えると、四川省の省都・成都があります。三国時代(3世紀、日本では卑弥呼の時代)には、長安の魏(曹操)、成都の蜀(劉備)、揚州の呉(孫権)が拮抗、中でも、魏と蜀の覇権争いは熾烈を極め、切り立った崖に作った桟道を通り、諸葛亮孔明と司馬懿仲達が何度も戦いました。今では、西安と成都を4時間で結ぶ高速鉄道が開通しています。

三国志少年だった僕は、成都の顧客を訪問した帰りには足繁く、諸葛亮孔明を祭った武侯祠にお参りしました。孔明像の横には主君の劉備、盟友だった関羽、張飛の像も並んでいます。孔明は、劉備に三顧の礼で迎えられた希代の軍師でした。「饅頭」は川の神様を鎮める生贄の風習をやめさせるために孔明が考案したものと言われています。天文や気象、さらに機械工学にも通じ、呉と同盟した赤壁の戦いでは、長江を渡る季節風の予測に基づく「火計」で魏軍の船を焼き尽くし、曹操を潰

走させました。そして、強国の魏、呉に割って入り、第3極の蜀漢を築きました。後に、臨終の劉備から禅譲を勧められましたが、私利私欲に溺れず、あくまで軍師として2代皇帝・劉禅をよく補佐しました。そして、有名な「出師(すいし)の表」を発し、「中原」を目指して北伐を行いました。凡庸と言われた劉禅は「亜父よ、そこまで頑張らなくてもいいよ。蜀の地で静かに暮らそう」と懇願しましたが、孔明は先帝・劉備との約束を頑なに守り、北伐を通算5度も敢行、「秋風五丈原」で没しました。「泣いて馬謖を切る」、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」など、著名なエピソードも多く残されています。

さて、蘇州にある新興企業の社長さんと三国志について意気投合したことがあります。社長さんはお宝にしているという扁額を見せてくれたのですが、それは五丈原で孔明が亡くなるとき、嫡男の諸葛瞻に残した「澹泊明志(たんぱくめいし)」でした。

「私利私欲に溺れることなく淡白であれば、志を明らかにできる。」実際の遺言はこの後に、寧静致遠(ねいせいちえん)と続きます。後世の人々は孔明を、私利私欲のない立派な軍師と讃え、この遺言もそれを表わすものだったとするのが定説です。しかし、武侯祠の孔明像を見ていると、この遺言の裏には、「北伐」に拘り、軍備にお金をかけ過ぎて、我が蜀漢を疲弊させたことへの忸怩たる思いが込められているような気がしてきます。1800 年前も今も、淡泊に生きることは難しい・・・。

中国よもやま話(5)現代の水滸伝?(2023.2)

西元善郎(竹の台)

「水滸伝」は、宋代、梁山泊に集った英傑たちの波乱万丈の農民革命伝奇で、三国志や西遊記と並ぶ三大物語です。今回はいささか小粒ですが、水滸伝現代版として南京の少し風変わりなお話をします。

南京は、上海から長江(揚子江)を300km ほど遡った上流にあり、三国時代の呉、南北朝時代の六朝、それに

宋や明が北方から攻められた際の都でした。15 世紀には世界最大級の都市だったとも。そして、20 世紀には中華民国政府があり、日中戦争での南京事件の舞台にもなりました。近年は超高層ビルの立ち並ぶ近代都市となっていますが、不動産ブームに乗って一代で財を成した地元の富豪と、たまたま、会食をする機会がありました。歓談の中で案の定、南京事件の話題が出ました。南京の人々にとってあの屈辱は小さいときから学校で叩き込まれているそうで、反日感情が強い土地柄だけに自然な成り行きです。でも、僕は理系人間で、歴史、特に近代史に疎くてどうコメントすべきか迷ったのですが、ここは率直に、「民間人の虐殺がどの程度あったのか、僕は知りません。でも少なくとも、同じアジア人なのに、日本だけ、欧米列強の猿まねをしたことは、正直、少し
恥ずかしいです・・・」と申し上げました。それに対して、その富豪は「日本の負の歴史と言える『南京屠殺』について逃げずに語った日本人はあなたが初めてだよ」といたく感激されました。

この会食以来、この富豪とは朋友となり、日本に招待したり、米国シカゴでの国際会議にも一緒に行ったりしました。親しくなると、彼は、「実は、自分は貧民出身で満足に医療も教育も受けられなかった。なので、たまたま儲けたお金は病院や学校を建設して社会の役に立ちたい」との志を語ってくれました。「病院では、先端医療として MRI 画像診断システムも置きたい」と。その志に共感した僕は、当時担当していた会社が得意とする MRI の心臓部に当たる超電導磁石の製造方法を指導することとなり、10 名を越す技術者が研修のために神戸を訪れました。

その返礼として、富豪の別荘に何度かご招待戴いたことがあります。南京郊外の山まるごとの大別荘には、使用人が何と 300 人、別荘で食べるものは肉から野菜までほとんど無農薬で自給自足、医療スタッフもそろっていて、中国式針灸専門の南京大学教授まで駐在という桁外れのリッチさでした。あるとき、別荘の居心地があまりにも良過ぎて、南京空港発のフライトに乗り遅れそうになったことがありました。その富豪は、一言、「任せて下さい」と言うと、南京空港に電話一本。定刻の30分も遅れて空港に着いたのですが、何と、パイロットと公安(お巡りさん)にお出迎え戴き、特別なルートで搭乗案内されました。僕は、海外出張中、このときくらい恥ずかしい思いをしたことがありません。何しろ、自分のルーズな時間管理のせいで、100 人以上の人を待たせてしまったのですから。でも、搭乗客の皆さんの視線は冷たくはありませんでした。中国人14億人にはこうるさい人もいれば、おおらかな人もいて桁違いに多様なようですが、少なくとも、30分や1時間は没問題のようでした。

やがて 2012 年、中国は胡錦涛さんから習近平さんにバトンタッチされるとともに、反腐敗の引き締め運動が起こりました。当初は形だけの綱紀粛正かと思いきや、習近平さんの本気度は僕たち日本人にも伝わってきました。元々、汚職の多かった国民党を反面教師としてきた共産党としては、

モラルの高さは生命線だったのかも知れません。翌年には南京市長が汚職容疑で解任されましたが、それと関連あるのか不明のまま、かの富豪も忽然と姿を消しました。華僑のネットワークを頼りに海外に逃れて再起の時を待っているとの風聞もありますが、詳しいことは分かっていません。いずれにしても、中国って、日本人的なスケールには収まらない、やっぱり水滸伝の国なんだと瞠目したエピソードでした。

中国よもやま話(6)敦煌への誘い(2023.3)

西元善郎(竹の台)

井上靖の名作「敦煌」、11 世紀の宋代、科挙の試験で居眠りして落第した趙行徳が西域に赴き、西夏王国との戦乱の中、命がけで当地に伝わる数万点もの経典を石窟に隠します。そして 1900 年、偶然に発見され、旧来の東洋学を書き換える貴重な仏典やサンスクリット語、西夏文字の経典、壁画が蘇った壮大な歴史ロマンです。

学生時代にこの小説を読んで以来、いつの日か、敦煌を訪れてみたいと思っていました。還暦を過ぎてたまたま蘭州の中国科学院・近代物理研究所と技術交流の機会があり、そのついでに(と言っても、1,000km 近く離れていますが(笑))敦煌まで足を延ばしました。敦煌は、長安(西安)から出発するシルクロードが河西(オアシス)回廊を経て、天山北路と天山南路に分かれるちょうど分岐点にあります。北東のゴビ砂漠と南西のタクラマカン砂漠に挟まれた地域でもあり、古くは「沙州」と呼ばれました。「ゴビ」は不毛の地、「タクラマカン」は一度入ると戻れない土地のこととか。だから、敦煌郊外には「陽関」や「玉門関」などの関所が設けられた訳で、唐代の詩人・王維が西域に旅する友人の元二に贈った有名な漢詩にも登場します。

渭城朝雨潤輕塵渭城の朝雨軽塵を潤し
客舎青青柳色新客舎青青柳色新たなり
勧君更盡一杯酒君に勧む更に尽くせ一杯の酒
西出陽關無故人西のかた陽関を出ずれば故人無からん

敦煌では、まず、「鳴沙山」に行きました。タクラマカン砂漠の東端に位置する砂の山で、歩くと、キュッキュッと砂が鳴き、手に触れると、何ともきめ細かくて悠久の時間を感じさせます。砂を踏み鳴らしながら、しばらく徘徊すると、砂漠の真ん中にオアシスが忽然と現れました。ここは「月芽泉」、月芽(三日月)形の泉があって、砂漠の中で人々が寄り添って暮らしていた所だそうです。でも、往時に比べて泉の広さは半分以下に減ってしまったとか。「鳴沙山」、「月芽泉」の後は、いよいよ「莫高窟」。「鳴沙山」の山肌に、南北1.6kmにわたって600もの洞窟が掘られています。古くは4世紀の五胡十六国時代から始まり、13世紀の元、フビライの時代まで、何と 1,000 年にもわたって掘られ続けたそうです。600の洞窟の中には、2,400もの仏像が安置され、「莫高窟」は別名、「千仏洞」とも呼ばれています。シルクロードの命懸けの旅の安寧を求めての「祈り」だったのでしょうか。「莫高窟」で最も名高い壁画は第57窟の菩薩様です。でも、個人的にはその入口近くの「天邪鬼」
が目に留まりました。人間の煩悩の化身で、元々は守護神の四天王に踏みつけられていたそうですが、四天王が既に朽ち果てて、煩悩の「天邪鬼」だけが寂しく残っている姿が何とも印象的でした。

翻って、敦煌文書は「敦煌学」という学問まで創出した「文化の化石」とも呼べるものですが、一体、誰がどういう目的で第16窟に隠し穴まで掘って隠したのでしょうか？莫高窟を散策しながら、井上靖のイメージを反芻するに・・・当時、戦乱が迫り来る中、誰もが家財や財宝を荷造りして、難を逃れ
ようと右往左往していた。その中で次のように考えた者がいたとしても不思議ではない。「権力も財宝も名誉も命も、やがて終わる。例外なく朽ち果てる。でも経典は誰のものでもない。ただ、焼けずに、そこにあるだけでよい。」人は誰しも、生きている間に一度は、「永遠」というものに想いを致す瞬間が訪れるのかも？砂漠は「永遠」というものにつながる不思議な場所なのかも知れません。

中国よもやま話（7）万里の長城（2023.4）

西元善郎（竹の台）

首都・北京には技術交流で北京大学や清華大学をよく訪問しましたが、ついでに紫禁城や明の十三陵見学など、また、北京五輪まで賑わった知る人ぞ知る「秀水市場」（バッタ屋街）にも足繁く立ち寄りました。お土産にチャイナ・ドレスを1着買ったら、気前よくおまけを4着もくれて、処置に困った経験もあります。しかし、何といっても度肝を抜かれたのは北京郊外・八達嶺（Badaling）で垣間見る万里の長城でした。

現存全長 8,800km、日本列島が3,000kmなのでその壮大さが分かります。早くも紀元前7世紀の春秋時代に建造が始まり、秦の始皇帝が一旦完成させました。その後、崩壊、修復を経て 16 世紀の明代に再建、現在の姿になりました。古来、中国では黄河中・下流域の肥沃な地を「中原」と呼び、漢民族が暮らし、四方を未開の北荻、東夷、南蛮、西戎とする中華思想がありました。この流儀でいくと、大和王権以前の日本は東夷に属し、歴史書・後漢書東夷列伝に登場する「金印」の話はつとに有名です。でも、中原にとっては北荻、つまり北方の騎馬民族の脅威が最も苛烈だったようで、せっかく豊作で収穫しても、営々と財産を貯めても、ある日の襲撃で一網打尽にされ、嫁も娘も略奪され、男は皆殺しにされました。そのために、外来王朝の元と清を除けば、2,300 年間、営々と長城が築かれてきた訳で、「専守防衛」の涙ぐましい歴史が滲み出ています。つまり、中原に住む人々は武力では、北方・西方の騎馬民族、東方・南方の海賊に対抗できず、その都度、儒教や儀礼といった文化を通じて外交

努力し、ある時は公主を嫁がせて婚姻関係を結び、周辺国と折り合ってきました。和平が実現すると、周辺の民は中原を「るつぼ」のようにして融け込み、その結果、いわゆる「漢民族」が拡大形成されていったようです。実際、満州族が武力で征服した清王朝などもいつの間にか、漢民族に呑み込まれてしまったようです。漢字、紙、火薬や羅針盤といった多くの素晴らしい発明も、遺伝子の混ざり合いによる多様性の中で生まれてきたものかも知れません。

そのようして五胡十六国時代など一部の分裂時代を除けば、広大な中国大陸はほぼ統一して統治されてきました。ここが、古代以来、離合集散を繰り返す欧州と決定的に違うところです。欧州の場合、全体でも人口は中国の半分程度で、しかも、キリスト教の精神風土も共通なのに、多くの国に分かれ、いがみ合い、二度の大戦の火種となったのは記憶に新しいことです。その反省に立って、EU(欧州連合)がようやく設立された訳ですが、その後も英国が離脱したりして波風は絶えません。一方、中国は 3000 年の歴史の中で紆余曲折はあったにしても、14 億の民をとりあえず一つにまとめており、周辺諸国にとって、地政学的にも経済的にも恩恵は少なくないでしょう。

これまで、北京郊外・八達嶺の長城には3度、西方の寧夏・回族自治区の長城(右写真)には2度訪問しましたが、長城に塗り込められた漢民族の悲哀の歴史を振り返りながら、何となく「故きを温ねて新しきを知る」旅になったような気がしました。

中国よもやま話（8）遥かなる九寨溝（2023.5）

西元善郎（竹の台）

九寨溝はチベット語で、「九つの美しい郷」という程の意味で、中国人が一生に一度は訪れたい秘境の一つだそうです。世界遺産にも登録されています。西安・国立研究院の院長さんよりお誘いを戴き、思い切って探訪しました。以前は成都経由陸路10時間の長旅でしたが、九寨溝空港開港後は西安から空路1時間となりました。ただ、空港の標高が3450mもあって空気が薄いため、滑走路も倍の3200mで、切り立った断崖をぬっての着陸はちょっとスリリングでした。空港からさらに車で100km走り、ようやく九寨溝の入口に着きました。

太古、海底だったチベットは南からぶつかったインド半島に押され、隆起したものです。そのチベットの東端に位置する九寨溝も海底でサンゴが堆積して出来た石灰層で、渓流が削った渓谷や湖沼を形成しています。湖には多量のカルシウムイオンが溶けているため、木の葉や生物の死骸などの栄養分は湖底に沈殿する、これが九寨溝の水が澄みきっている理由です。この透明度によって、太陽光の内、赤い光は殆ど透過され、青い光だけが散乱されて水面はコバルトブルーに青く、あるいはエメラルドグリーンに碧く見える訳です。五彩池など刻一刻色合いを変えていくのも想像を絶する神秘さでした。なお、2017年に M7.0 の九寨溝地震が発生、水が濁ったり、枯れたりしたそうですが、中国政府としては出来るだけ人為的手段を控え、自然の回復力を待つ方針とのことです。

九寨溝の次は黄龍、こちらはさらに標高が高く、4120mの峠を越えていきます。僕が蒼い顔をしていると、ガイドさんが高山病に効く「紅景天」という漢方薬のお店に立ち寄ってくれました。チベット原産のベンケイソウを煎じたもので、英名 Guarana。ロシアの宇宙飛行士が携行して有名になった高級漢方です。郷に入っては郷に従え、1本飲んだところ、心持ち、息苦しさが緩和されたような気分でした。きれいに整備された桟道の所々にも酸素ステーションがありました。

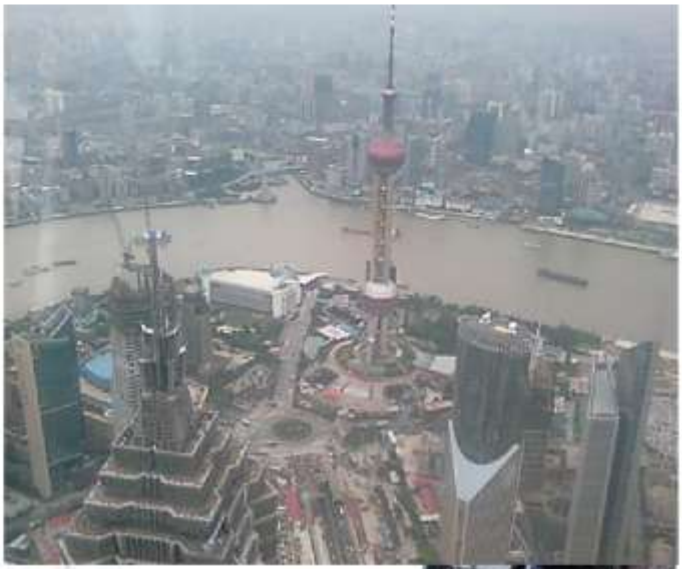
九寨溝から黄龍に行く途中、鄙びたチベットの村の山頂に奇妙な銅像が見えました。ガイドさんによれば、第二次大戦中の国共内戦で蒋介石に押され、旗色の悪くなった共産党幹部が延安や重慶から最後はこの九寨溝くんだりまで逃げてきた由。しかし、歴史とは皮肉で、日本軍が蒋介石率いる国民党軍を散々に傷めつけたため、共産党が盛り返すことになります。1949年に内戦が終ったとき、ここまで逃げてきた苦難の日々を忘れないよう銅像が建てられたとか。

因みに、4日間の九寨溝・黄龍行脚のガイドをしてくれたのはチベットの大学を出たばかりの美花(MeiHua)さんという方。遺伝学的にも共通点は多いそうですが、顔は日本人とよく似ていて、神戸の街を歩いていてもチベット人とは分からないでしょう(笑)。僕は親しみを感じて、にわか勉強中の中国語で話してみましたが、ほとんど通じず(涙)・・・でも、同行した西安の研究院長でもなかなか通じなかったらしく、やはり中国は広大です。その中で、ひとつ教えてもらったのはチベット語の方言で「さよなら」を「Doumo(ドウモ)」ということ。毎日の帰り際、中国語の「明天見」ではなく、「ドウモ!」と挨拶出来て、チベットの薄い空気に少しなじんだ気分になりました。

中国よもやま話(最終回) 好きやねん、上海 (2023.6)

西元善郎(竹の台)

シルクロードの出発地・長安に始まり、西夏王国、成都の武侯祠、南京、敦煌・莫高窟、北京・万里の長城、そして、九寨溝と7つの土地での経験談をご紹介してきました。北方では瀋陽や大連、南方では杭州や香港・深圳にも行きましたが、別の機会に譲り、中国よもやま話の最後はやっぱり一番好きな上海にします。



ご存じの通り、明代の庭園「豫園」など歴史名所もありますが、今日の上海は何といっても、外灘(ワイタン)の電視塔(468m)、それを見下ろす上海中(632m)や上海環球金融中心(492m)の超高層ビル、そして上海リニアなど近未来都市風景が目立ちます。でも、華やかな近代的風景の陰に昔ながらのバラックが残っていたりすると、ごたごた感が妙に馴染むとともに、ふと、幕末に高杉晋作が見た上海の街並みがデジャブのように蘇ります。ちょうどアヘン戦争後のすさんだ時代で、高杉の衝撃は半端でなかったそうです。

かつて英国の東インド会社はアジア貿易を独占するとともに植民地支配の司令塔だったことは歴史で学びました。一方、茶にまつわる裏の歴史は陳舜臣の「阿片戦争」等で垣間見れます。東インド会社が中国のお茶をロンドンに持ち帰ったところ、「世の中にこんな美味しいものがあったのか」と大人気にな

りました。元々、味覚が未発達なアングロサクソンが感激したのですから、お茶ってやっぱり稀有な味わいなのでしょう。だから、英国の紅茶（tea）もインドのチャイも、語源が茶（cha）なのは当然です。それ以来、お茶を楽しむことが英国的習慣となり、高価なお茶をどんどん輸入したため、代金が払えなくなりました。（英国がインドの奥地アッサムやダージリンで茶を栽培するようになったのは後年のことなんです。）そこで、三国貿易など知恵を絞り、不埒にもインドのアヘン（麻薬ヘロイン）を中国人に吸わせて中毒患者を大量につくり、貿易不均衡を解消していったわけです。何千万人もの廃人をつくるなどやくざでも二の足を踏むような非人間的な仕打ち・・・

　そして、苦し紛れに始まった反英運動を口実に戦争を起こし、香港の強奪、上海の租界、巨額の賠償金などで、その後の列強の中国植民地化のきっかけとなりました。その後もアヘン中毒患者は累計数億人にのぼり、根絶されたのは、ようやく中華人民共和国になってからのことでした。だから、中国人は、アングロサクソンのヒューマニズムを基本的に信用していないのです。そして、150 年後の 1997 年、50 年間は1国2制度でいくという約束で、香港は中国に返還されました。近年、香港の自治が制限されていく動きに対しては僕も賛同はしかねますが、しかし、アングロサクソンにだけはとやかく言われたくないというのが中国人の偽らざる気持ちかも知れません。

　いずれにしても、敦煌やチベット、四川省など奥地を旅していても、上海まで帰ってくると、もう帰国したような気安さがある街です。何しろ、福岡空港までなら1時間半のフライトですから。

心に染みる言葉(1)黒澤明さん （2023.7）

西元善郎（竹の台）

　今の時代、安倍元首相の 118 回もの国会虚偽答弁（衆院調査局調査）やトランプ元大統領の詭弁、ネットでも相手をこきおろすためだけの論破王など薄っぺらい言葉があふれています。でも、耳を澄ますと、共感を呼び起こし、心に染みる言葉も聞こえてきます。本稿では、たまたまですが、耳に挟んだ心に染みる言葉を紹介していきます。

1人目は、映画監督の巨匠・黒澤明の言葉で、朝日新聞 6/7 の折々の言葉（鷲田清一）に紹介されていました。

「何が何でも、戦争だけはしちゃいけない」

解説をそのまま転載すると・・・この考えだけは「ピクリとも動かなかった」と、映画監督の生涯を娘の和子はふり返る。いったん戦争が始まってしまうと、虫も殺せなかった人が「鬼の形相」で人を殺（あや）める。恐怖の連鎖の中でついに「人間が人間でなくなる」。そういう深い傷から立ち直るまでに「さらに世代を超えて累々と悲しみは続くんだよ」と語っていたと。

実際、ウクライナ戦禍を見れば、黒澤の言葉は図星です。「国の名誉のために勝つまで頑張る」「絶対に負けられない」「せめて、有利に停戦に持ち込みたい」・・・国の威信や勝利のためなら犠牲にしてよい命などあろうはずもないのに、支配層の我欲やメンツのために日々、双方の兵士、そして何の罪もないウクライナの民間人が亡くなっていきます。元々親しい国どうしなのに・・・。そして、遺恨は今後、数世代に渡って続きます。しかし、その頃には今、戦争を推進している為政者、陰で戦争をはやしたてている死の商人は全員、いなくなっており、誰も責任を取らない。ただ、遺恨と哀しみが連鎖していきます。

ならば、根本解決はもっと智恵の出るはずの子や孫に託して、とりあえず、目をつぶってでも直ちに停戦することは多数の人々の願いのはず。でも、何故か、それが出来ない。まわりの国も武器を送って煽り立てるばかり。やっぱり、

「何が何でも、戦争だけはしちゃいけない」ということなんですね。

心に染みる言葉(2) 池田香代子さん(2023.8)

西元善郎(竹の台)

コロナで中断、6年ぶりとなる「9条の会」全国交流集会が 5/28、東京の日本教育会館で開催されました。今年3月に亡くなられた大江健三郎さんの9条に対する想いを引き継いで 293 名が参加、各地の「9条の会」のリレートークがあり、西神 NT9条の会からは大西さんが駆け付け、活動報告されました。その様子は下記 YouTube で今も閲覧出来ます。

https://www.youtube.com/watch?v=63dhDUNvU28&t=8595s

後半、世話人からもスピーチがあり、池内了先生の「軍事研究は学問を殺す」熱弁はいつもながら印象的でした。中でも、翻訳家・池田香代子さんの次の言葉が心に響きました。

「攻められたらどうする?」と迫られた時、私なら「それって、ナチスの宣伝相ゲッベルスの言葉ですよ。あなたはゲッベルスに乗せられていませんか?」と答えるようにしている。ちょっと実のある対話が出来ることもあります(笑)。

さすが、ドイツ語翻訳家ならではのリアリティがある上に、池田節の柔らかい言い回しですうっと心に響きますね。

「北朝鮮のミサイルが落ちてきたらどうする?」「中国が攻めてきたらどうする?」「この夏、コロナで感染爆発の可能性がある」「ワクチン接種すると死ぬ可能性がある」・・・これらは人々の不安を煽る常套句です。極めて低い確率と分かっていても、繰り返し言われると、たいていの人は不安に陥ります。

その極端な例が、家族に少し不安を抱えた人に対する旧統一教会の「寄付しないと、家族がますます不幸になる」という脅しです。

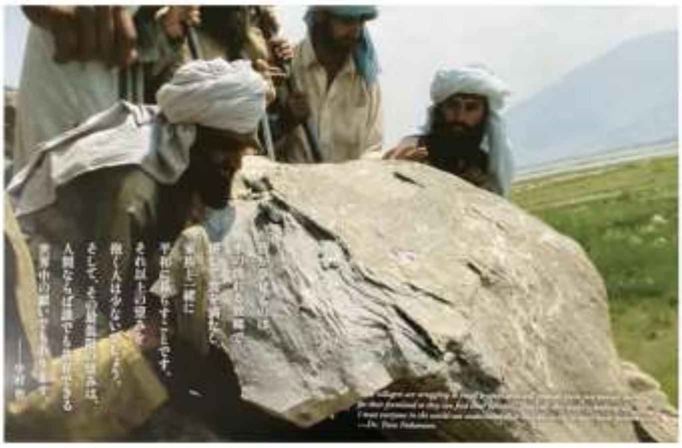
こういう時は、池田香代子さんに倣って、ゲッベルスの冷酷なマインドコントロール顔を思い出すことですね。

心に染みる言葉（3）中村哲さん（2023.9）

西元善郎（竹の台）

西神ニュータウン９条の会の 2022 年のつどいには、ペシャワール会より藤田千代子さんをお迎えし、30 年間、中村哲医師と歩んでこられたお話を伺いました。それがご縁で、我が家のリビングには、ペシャワール会のカレンダーが架かるようになりました。どの月も、アフガンでの人道支援の現場から発せられた重いつぶやきに心を打たれますが、ここでは 2003 年のマルワリード用水路建設現場で撮られた岩石除去作業と中村哲医師の言葉を紹介したいと思います。

皆が夢見るのは、
水の流れる故郷で
耕して食を満たし、
家族と一緒に
平和に暮らすことです。
それ以上の望みを
抱く人は少ないでしょう。
そして、その最低限の望みは、
人間ならば誰でも共有できる
世界中の願いでもあります。
－中村哲



ペシャワール会カレンダー2023 年 ７ 月

先進国、発展途上国に拘らず、現実は、中村哲医師の言われる**最低限の望み、ささやかな夢**とはかけ離れて、富が集中し、貧困が広がっています。コンピューターやロボットなど科学技術の進歩によって労働生産性は飛躍的に向上し、その成果をみんなで仲良く分ければ、それなりに豊かに暮らしていけるはずなのに、なぜ、貧困が広がるのでしょうか？背景に「貪欲」が見え隠れします。

何万年もの間、飢餓に苦しみながら生き延びてきた人類にとって、確かに「貪欲」は習い性であり、少しでも多くの貯えをしておきたいと願うのも自然な心情です。それが合わさって、競争に打ち勝ち、経済を成長させる原動力にもなってきました。しかし、欲は度が過ぎると、まるで癌のように「主人」をも食い尽くすほどの凶暴性を持ちます。苦境の日産を立て直しながら、貪欲に沈んだカルロス・ゴーンが目に浮かびます。

耕して食を満たし、家族と一緒に平和に暮らす。それ以上の望みを抱く人は少ないはずなのに、一部の貪欲な人間が、子供どころか孫まで一生遊び暮らしても

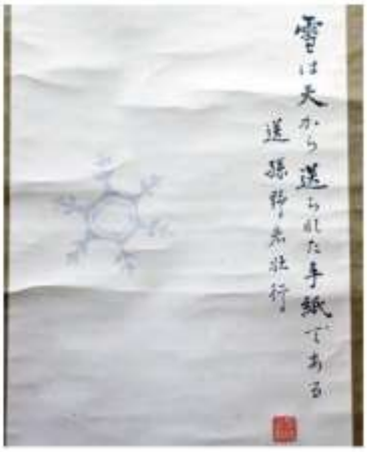
使い切れないほどの蓄財をし、それでもまだ富を欲しがる・・・本来、手段であるはずの財産が人生の究極の目的となり、独り占めの結果、多くの同胞を貧困や飢餓に追いやってしまいます。当然、世の中は物騒となり、莫大な治安維持コストがかかる上、子孫が安心して暮らせる持続可能な社会からどんどん離れていきます。

　ほんとのところ、どうすればいいのでしょう？難しい問題です。
人間ならば誰でも共有できる最低限の望みを実現していくための心構えは結局、「腹八分目」ということかも知れません。そして、それこそが、「貪欲」という癌に効く特効薬のような気がします。「腹八分目」は日本古来の健康法とも言われています。中村哲医師が体現されたように、日本が「憲法9条」と「腹八分目」で、貪欲に苦しむ世界を救うお手本になれればいいですね。

心に染みる言葉(4)　中谷　宇吉郎さん（2023.10）

西元善郎　（竹の台）

　中谷宇吉郎は、雪の研究で知られる科学者ですが、師であった寺田寅彦の「天災は忘れた頃にやってくる」という至言を世に知らしめたエッセイストとしても有名です。



　その中谷の何気ない言葉が朝日新聞の折々の言葉に載っていたので紹介したいと思います。

政治には科学は役立たなくても、
政治家に科学的訓練を与えることは、
役に立つ。
中谷　宇吉郎

　科学を学んで得られる大切なものは科学的な考え方が出来るようになることだと物理学者は言う。不偏不党の観察、粘り強い思考、冷静な推論など政治の判断に必要な能力も科学によって鍛錬するのが早道だと。

　近代科学の最大の価値は、客観性と再現性です。つまり、立場の違いとか場所や時代の違いに拘らず、科学法則は世界共通であって、その共通基盤の上で、ものごとの判断をした方が間違いが少ないということです。ところが、明治以来、日本の政治家や官僚は、なぜか数学や理科の苦手な文系出身が優勢で、欧米のような科

学行政官が育たず、伝統的に自然科学の共通基盤が脆弱なようです。ですから、政治判断が主観的、恣意的になりがちで、中谷は科学の鍛錬を薦めている訳です。

今、もめている福島第一のタンク水の海洋放出問題にしても、「処理水」か「汚染水」かと言った上っつらの論戦に終始し、トリチウム（3重水素）とは何物で人体に対する影響はどの程度か？ALPS（多核種除去設備）は何をしているのか？検出限界は？などの共通基盤がないため、極めて低レベルの議論になっています。その結果、疑心暗鬼を生み、風評被害に繋がっています。

難しい問題ですが、疑心暗鬼の背景には次の3点があると思います。
第1は、「10年も放出をためらってきたタンク水が、今になって、なぜ急に海洋放出してよいほど安全になったか」という漁協の方々を中心とした素朴な疑問です。本当に処理水が安全なら、満タンになるずっと以前から放出できたはずだからです。正直な説明が不可欠です。
第2は、原発事故で信用が地に落ちた東電のデータを信じることが出来ないという哀しい心配です。IAEA（国際原子力機関）のお墨付きは方法論に対してであって、今後の実行段階でのデータの信頼性を担保するには、第3者機関に測定を依頼し、データを公表する、場合によっては、中国や韓国などの科学者にもモニタリングに参加してもらうのが合理的と思います。
そして、第3として、本間さんも指摘されていましたが、最も悩ましい疑念は「放出がいつまで続くか？」です。タンクに溜まった100万トンの水を放出したら終わりではなく、今も毎日100トンの地下水が炉心の核燃料デブリ付近を通って流れ込んできています。これは、デブリを取り出して廃炉が完了するまで続きます。東電の廃炉ロードマップでは、2021 年にはデブリの取り出し開始だったはずですが、23 年になっても開始の糸口すら見えていません。この遅れに対して説明責任も果たしてくれていません。原子力工学を学んだ者なら、人間はもちろんのこと、ロボットでさえも短時間で壊れてしまうほどの過酷な放射線環境下で1～3号機に残る推定 880 トンもの膨大なデブリを取り出す技術が未確立なことは痛いほど分かっています。だから、放出は半永久的に続くと考えておくのが妥当なのです。だとしたら、タンク水は半永久的に放出するのか、そんな先のことに誰が責任をとれるのかという問題です。

国民と近隣諸国の疑念を払拭するには、中谷宇吉郎の指し示す通り、政治家や官僚が「不偏不党の観察、粘り強い思考、冷静な推論」など政治の判断に必要な共通基盤を鍛錬し直すことが急がば回れかと考えます。国民も、政治家や専門家に丸投げするのではなく、また、風評や同調圧力に流されることなく、一人一人の頭で何が本当か見極めていくことが自分たちの安全と安心を守る道だと思います。

心に染みる言葉（5）丹羽 宇一郎さん　（2023.12）

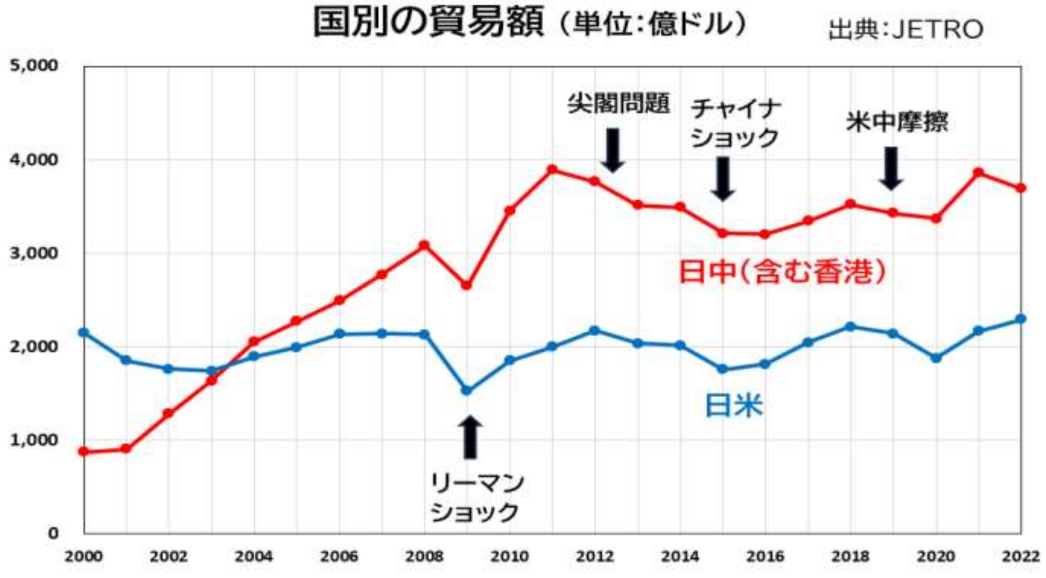
西元善郎（竹の台）

丹羽宇一郎は、1990 年代、バブル崩壊で巨額の不良資産に苦しんでいた伊藤忠商事をトップ商社に建て直した辣腕経営者です。民主党政権時代には、ビジネスで培った中国人脈を買われて民間人初の駐中国大使を務め、習近平とも面識があるそうです。その丹羽の近著「民主化する中国」(2022 年刊)の第4章に、次の記述があります。日中問題は政治がらみや好き嫌いで議論されることが多いのですが、ここでは経営者らしく経済視点(つまり損得勘定)から論じられており、いささか新鮮に感じましたので、紹介させて戴きます(p.189)。

日本の一番の貿易相手国はアメリカというのが、多くの日本人の持つイメージだろう。しかし、国別の貿易総額ではすでに中国がトップである。・・・中国は、日本にとって最大の「仕入れ先」であるとともに、最大の「販売先」なのである。

かつては、アメリカがくしゃみをすれば日本が風邪をひくと、アメリカ頼みの日本経済を揶揄していたものだが、くしゃみを心配する相手は今や中国だ。

実際、日米、日中の貿易額推移を調べると、2004 年に米中で逆転して以降、尖閣問題や米中摩擦など政治的逆風があったにも拘らず、常に中国貿易が上回っていることが分かります。加えて、日中貿易額は日本の貿易総額の実に 1/4 にのぼっており、今や日本経済が中国に大きく依存しているのが現実です。



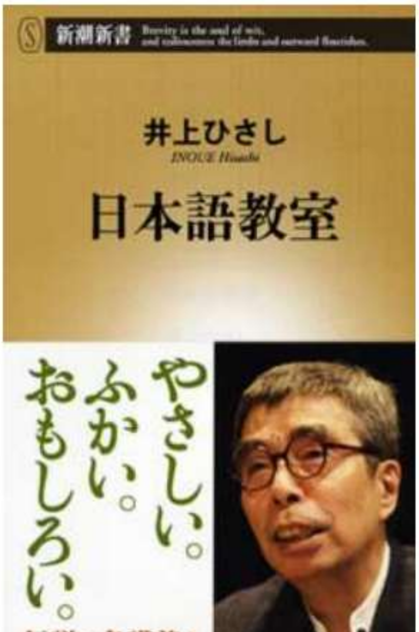
資源に恵まれない日本が自由貿易でなりわいを立てていることは小学生でも知っています。ですから、日本は中国なしでもやっていけるといった強弁は、既に議論自体がナンセンスなのです。貿易の 1/4 が消えたら、経済は全く立ち行きません。この21世紀のグローバル時代、デカップリングやブロック経済は所詮幻想なのです。中国の不動産バブルがはじけて中国経済が苦境に陥っているのを、「ざま、見ろ！」「中国は終わった」などと喜ぶ輩は、無知なのか、大局を見ない子供じみた態度だと言わねばなりません。

実際、中国の不動産バブル崩壊のインパクトは大きく、中国経済に長期の足枷となることが懸念されますが、それによって、日本経済にも少なからぬ影響があるでしょう。なんとか一つにまとまっている中国がバラバラになったら、何が起こるでしょうか？推定 410 発の核弾頭が拡散するリスク、さらには億単位の難民が日本にも押し寄せてくるリスクもあるでしょう。そうなれば、「くしゃみで風邪」くらいでは済まないでしょう。

人にはそれぞれすき嫌いがあるのは理解できます。ただ、それはそれとして、他国、特に隣国とは、角を突き合わせるより、お互い仲良くした方がお得で、大人の態度であることをもう一度、思い出したいものです。

心に染みる言葉（6）井上ひさしさん（2024.1）

西元善郎 （竹の台）



理系 120％の僕にとって作家・井上ひさしは、子どもの頃見た「ひょっこりひょうたん島」や、ひょうきんな書名に惹かれて図書館で借りた「吉里吉里人」くらいしか馴染みがありませんでした。最近、西神 NT9条の会に参加するようになり、井上ひさしが全国「九条の会」の9人の呼びかけ人の一人だったことを知り、「子どもに伝える日本国憲法」（絵：いわさきちひろ）を孫に贈ったりしたものです。また、今年は地元の劇団道化座が原爆体験を扱った「父と暮せば」の公演を西宮の芸文ホールで開催し、深刻なテーマを笑いとペーソスで描く二人芝居を堪能しました。

その井上ひさしが母校・上智大学で後輩たち

に行った講義内容をまとめたのが「日本語教室」という単行本です。母国語と脳の関係、やまとことばの強み、ダジャレの快感など井上流ユーモア連発ですが、「日本語とは日本人の精神そのもの。一人一人が日本語を磨くことでしか、未来は開かれない」との指摘は言語学者や脳科学者にも勝る慧眼だと感じました。さらに、話の脱線ついでにと言いながら、さりげなく次の言葉がつぶやかれています（p.118）

完璧な国などないわけですね。かならずどこかで間違いを犯します。
その間違いに自分で気がついて、乗り越えていく苦労をしていく姿を、
他の国民が見たときに、そこに感動が生まれて、
信頼していこうという気持ちが生まれるわけです。

日本は、日中戦争から太平洋戦争のどこで間違えて、アジアの人々、そして自国民にも塗炭の苦しみをもたらしましたが、失敗の本質をまじめに考えようとすると「それは自虐史観だ」、「国を貶めるものだ」という強がり論が昨今、目立ってきています。確かに、まずかった点を忘れることが出来れば、めちゃ気持ちは楽になります。でも、自分の良かった点、悪かった点を客観的に振り返り、悪かった点にも目を背けず、向き合えることこそ、真に勇気のある人の態度だと思います。実際、戦後の高度経済成長においては、僕たちモーレツ社員は、反省の象徴としての憲法9条を心の片隅に置くことで、かつてひどい目に合わせた中国、朝鮮やアジアの国々とも、仲良く安心してビジネスをすることが出来ました。米国からの有形無形の改憲圧力にもめげず、軍需産業のロビー攻勢にも耐え、憲法9条を頑なに守り通してきた日本人のことを、世界中の心ある人々は、深く感じ入ってくれているはずです。だからビジネスでも胸襟を開いてくれたわけです。

想えば、この76年間、営々と続けてきた日本人の努力と勝ち得た他国民からの信頼を、安全保障環境が変わったからと言ってどぶに捨てるようなことは、敗戦から奇跡の復興を遂げた戦後日本人の努力のすべてを否定することに他なりません。

井上ひさしの言葉を道しるべに、憲法9条を最低でもあと24年もたせ、「戦争に近づかなかった奇跡の100年」として、歴史に輝く「平和ブランド」となるよう引き続き努力していきたいものです。

心に染みる言葉(7)ムヒカ元ウルグアイ大統領　(2024.2)

西元善郎（竹の台）

ホセ・ムヒカさんは、若い頃、反米ゲリラ武装組織に参加し、6 発の銃弾を受け、4 度の逮捕を経験したそうです。軍事政権が終わるまで 13 年近く収監され、出所後、左派系政治団体を結成しました。そして、1995 年の下院選挙で初当選を果たすと、農牧水産相などを歴任、2010 年から 5 年間、ウルグアイ大統領を務めました。大統領報酬の大部分を寄付し、月 1000 ドル(10 万円)強で生活していたので、「世界一貧しい大統領」としても知られています。

そのムヒカさんの 2012 年の地球サミットリオ会議でのスピーチは、保守からリベラルまで多くの人々の心に響くものでした。

西洋の富裕社会の傲慢な消費を、世界の 80 億の人達が
できるほどの原料が、この地球にあるのでしょうか？
なぜ私たちはこのような浪費社会を作ってしまったのですか？
消費が原動力となっている世界では、私たちは
消費をひたすら早く、多くしなくてはなりません。
消費が止まれば経済が麻痺し、経済が麻痺すれば
不況のお化けがみんなの前に現れるからです。
大変な悪循環の中にいることに、お気づきでしょうか。

古代ギリシャでも、南米先住民にもこんな言葉がありました。
「貧乏な人とは、少ししか物を持っていない人ではなく、
無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」。
これは地球サミットにとって文化的なキーポイントだと思います。

現役世代が今の8割に減る「8がけ社会」が近づいてくる中、どのようにして経済成長を維持していくのか、僕たちはもがいていますが、この半ば強迫的な苦悩に対して、ムヒカさんのスピーチはさりげないヒントを与えてくれているような気がします。昔からの日本人の性分「腹八分目」とも通底します。

そのムヒカさんが大統領退任後、2016 年に来日、東京外大で若者たちに講演されました。スピーチも素晴らしかったのですが、予定時間を超過しての質疑が好評だったそうです。ここでは、印象的な Q&A を一つご紹介します。

（学生さん）
ムヒカさんは、この世で一番大切なものは愛だとおっしゃいました。僕も、たしかにそうだと思います。しかし、ときに愛ってものは、恋人を独占するために、わが家族だけを裕福にするために、闘争とか貧困を生み出してしまうのかな、って思ってしまいます。

（ムヒカさん）
あなたの愛に対するビジョンは、所有的な考え方だと思います。あなたは好きな女性を自分のものにしたい。手に入れたい・・・でも、まずは彼女に聞かなければいけないんじゃないですか？

（学生さん）
最近、それでよくもめています(笑)。

（ムヒカさん）
私が思うに・・・結局、相手が選ぶんですよ。気づいていないだけかもしれませんが。自分だけで決められるなんて思わないでください。

（会場爆笑・拍手）

昨年来、ジャニーズや吉本興業など日本の芸能界にはびこる構造的な性加害問題が明るみに出ていますが、ムヒカさんのさりげないコメントが悪習を断ち切るヒントとなりそうです。

心に染みる言葉(8) 李登輝さん（2024.3）

西元善郎 （竹の台）

ご承知の通り、今年(’24 年)1月の台湾総統選挙では、民進党の頼清徳さんが 558.6 万票(得票率 40.1%)を獲得して勝利しました。民進党の3期連続の総統選勝利は初めてのことです。しかし、立法院(議会)選挙では、民進党は前回’20 年の 61 議席から 51 議席に後退し、第二党に転落、国民党が第一党に躍進しまし

た。日欧米のメディアは、台湾独立か、中国本土との統一かと対立を煽りましたが、台湾の人々は現状維持と言う実にバランスの取れた意思表示をしたようです。

その結果を聞いて思い浮かんだのが、台湾民主化の父・李登輝さん(’20 年に97 歳で死去)が残した名著「台湾の主張」です。国民党を率いた李登輝さんが総統を退く直前の 1999 年に書かれた遺言のような著作ですが、p.122 で右図を引用しながら、次のような言葉を述べています。親米と親中路線の絶妙のバランス感覚、25 年後の今回の選挙でも民衆の心に生きた慧眼だと思います。

「台湾の主張」のp.122より

私が微妙な立場にある台湾の外交を続けているので、
なにか「極意」のようなものがあるのかと聞かれることがあるが、
実はきわめて単純で明快なことでしかない。
それは「台湾が存在している」ということ、
「存在しているから希望がある」ということに他ならない。
・・・現在の状況で選択すべきなのは「両岸関係の増進」と
「現実外交の展開」による最もバランスのとれた状況だ。
台湾の安定を確保し、そのことで台湾が発展すれば、
台湾はますます「存在」を強く主張できるようになる。

李登輝さんは、日本の植民地時代の 1923 年台湾生まれで、戦前、京都大学農学部に学び、マルクスや川上肇の著作にも親しんでいたようです。そして、1944 年に学徒出陣で出征、千葉陸軍高射学校に見習士官として配属され、東京大空襲も経験、終戦を名古屋で迎え、いわゆるポツダム少尉となったそうです。「僕は22 歳まで日本人だった」というのが李登輝さんの口癖でした。戦後は台湾に戻り、台湾大学で農学研究者の道を歩みます。ところが、歴史は皮肉で、1947 年の 2.28 事件に巻き込まれます。この事件は、国共内戦で旗色の悪くなった国民党が台湾に拠点を移す中で起こった台湾民衆の抵抗でした。国民党は、民衆や知識人を弾圧、3万人以上を殺害しました。李登輝さんも弾圧される側にいましたが、何とか生き延びました。

その後、米国アイオワ州立大、コーネル大に留学し、博士号を取得、1978年に55 歳で台北市長に任命され、政界入り。その後はよく知られている通り、10 年

以上に渡って総統を務める中で、台湾初の直接選挙を実施、また、三権分立の重視で司法の権限も強化し、「血を流さない静かな革命」を遂行、台湾民主化の父と呼ばれるようになります。

　李登輝さんの紆余曲折の人生を振り返ると、若い頃は弱者に寄り添い、青雲の志を求めてマルクス主義に傾倒しましたが、その後、国共内戦や 2.28 事件を経て、また、大陸での文化大革命の混乱を見て、現実路線に転じ、最終的には、夫人の薦めもあってクリスチャンに救いを求めるようになったようです。この思想遍歴にはとても人間的な深みを感じます。

　同じ長期政権を築いた李登輝さんと安倍晋三さんですが、李登輝さんの人間的な深みを思う時、お爺さんの教えにひたすら忠実に反共を貫いてきた安倍さんの思想の薄っぺらさがとても対照的です。李登輝さんの遺産の元で民主化でも、デジタル化でも一歩ずつ前進している台湾に比べて、三権分立と民主主義をないがしろにし、安倍派のていたらくで長期停滞している日本を思うと、政治家に恵まれなかった日本人は、残念ながら大変なツケを背負わされているのかも知れません。